

東日本大震災

日本ユニセフ協会

緊急・復興支援活動

1年レポート

—子どもにやさしい復興をめざして



## ごあいさつ



2011年3月11日。この日を境に日本の人々の生活、考え方、生き方が大きく変わったと言っても過言ではないでしょう。

ユニセフにとっても、この未曾有の大震災は大きな衝撃でした。ユニセフが日本国内で支援活動を展開するのは、約半世紀ぶりのことです。第2次世界大戦後、約15年間続いた粉ミルクなどの学校給食を通じた支援や、1959年の伊勢湾台風被災者への緊急支援以来のことなのです。

私たち日本ユニセフ協会が支援活動を進めていくなかで、深刻な現状を目の当たりにし、自然の大きな力の前では、人間はあまりにも小さく、無力であることをあらためて思い知らされました。その一方、被災地で出会った子どもたちや人々の前向きな笑顔に感動し、復興へ向けた力強い想いに勇気をいただき、人の力の計り知れない可能性を実感することの繰り返しでした。

震災から1年。このレポートは、国内外からのご寄付をもとに、地元の人々や支援団体のみなさまと、日本ユニセフ協会がどんな活動を行ってきたかをご報告するものです。復興への活動はまだまだこれからではありますが、子どもたちに少しずつでも未来への希望を持ってもらえればと願いながら、これまで歩んできた道程をみなさまと分かち合うことができれば幸いに存じます。

子どもたちの未来のために、今こそ私たち大人が真剣に考えて、行動しなければならぬ時だと思えます。このレポートをこれまでご支援いただいたすべての方々へ、そして、いつも私たちに勇気と希望を与えてくれた子どもたちに捧げます。

震災に負けず、歩み続ける子どもたちの輝かしい未来を祈りながら…

平成24年3月

公益財団法人 日本ユニセフ協会 会長

赤松良子



【表紙写真】  
創作太鼓を奏でる子どもたち(岩手県大槌町「みどり幼稚園」にて)  
(撮影:佐々木 康)

## Contents

支援活動の目的と取り組み	1	心理社会的ケア	20
震災から1年	2	子どもの保護	22
1年間の支援活動状況／		子どもにやさしい復興計画	24
支援活動実施地域および被災状況 .....	2	あの日を忘れない	26
募金活動状況 .....	3	1年間収支報告	28
対談：		支援活動を支えてくださったみなさま	29
海に見える「美しいまち」を子どもたちへ	4	ご支援・ご協力のまとめ .....	29
保健・栄養支援	8	被災地／被災者への支援物資一覧 .....	29
教育支援	12		

# 子どもにやさしい復興をめざして

「あらゆる自然災害で、もっとも困難な状況におかれてしまうのは子どもたち」というユニセフの緊急時対応指針に則り、日本ユニセフ協会は、被災した子どもたちへの緊急・復興支援活動を続けています。ユニセフ本部コペンハーゲン調達事

務所、ユニセフ公的資金調達部東京事務所、並びに協力団体・企業などの協力を得て、保健、教育をはじめ、専門的な知識を必要とする心理社会的支援などの重要なサービスを提供するための支援を行っています。

## 緊急・復興支援における6つの取り組み

### 1. 緊急支援物資の提供

**目的:** 被災各地の避難所などへの物資支援

**支援内容:** 水、食料、物資、「箱の中の幼稚園」「レクリエーション・キット」などの提供

### 2. 保健・栄養支援

**目的:** 母子に対する保健医療・栄養サービスの再開と復旧

**支援内容:** 専門家の派遣、食料、栄養補助食品、物資・機材の提供、情報提供など

### 6. 子どもにやさしい復興計画

**目的:** 市町村における復興計画に子どもの意見を反映し、子どもおよび子育て支援の拡充を図る

**支援内容:** 専門家の派遣、アドボカシー活動\*

## 被災前よりも、より良い状態になること (Build Back Better)

子どもたちが安心して戻れる、  
子どもたちにとってやさしい「地域」の復興

### 3. 教育支援

**目的:** 学校、保育園、幼稚園の早期再開・再建

**支援内容:** 文房具・学用品の配布、各施設への建物・備品・機材の提供、通学・通園の交通支援など

### 5. 子どもの保護

**目的:** 孤児、遺児、貧困家庭、その他の脆弱な環境にある子どもたちを保護する包括的な国のシステムの強化

**支援内容:** 専門家の派遣、意識啓発、研修支援、国、県、市町村各レベルでのアドボカシー活動\*など

### 4. 心理社会的支援 (心のケア)

**目的:** 子どもたちの心理社会的支援システムの強化

**支援内容:** 「子どもにやさしい空間」のための書籍・備品の供与、未就学児を対象とした心のケアのための専門家派遣など

\*アドボカシー活動とは、各目的のためのパートナー団体との連携、調整、情報共有、また意識啓発や自治体への政策提言等の活動です。

# 震災から1年

## 1年間の支援活動状況 ※金額は、今後の実施予定分を含む

### 緊急支援物資の提供

支援総額: 187,309,517円

水、下着、子ども用衣類等

※詳しくはP.29の「ご支援・ご協力のまとめ」をご参照ください。

### 保健・栄養支援

P.8

支援総額: 768,471,953円

- 乳幼児健診を再開できた自治体の数  
**18市町** [岩手: 4市町、宮城: 14市町]
- 健診を受けることができるようになった子どもの数  
**約27,000名** [岩手: 4,000名、宮城: 23,000名]
- インフルエンザ予防接種の助成を受けることができる子どもの数  
**最大160,000名**
- 食器支援・給食センター修繕支援により、給食を食べられるようになった子どもの数  
**15,216名** (宮城)
- 保育園・幼稚園での補食(おやつ)支援を受けた子どもの数  
**約830名** (岩手: 25施設)

### 教育支援

P.12

支援総額: 2,476,704,703円

「バック・トゥ・スクール(学校へ戻ろう)」キャンペーン

- 学校の再開にあわせて、文房具セットの支援を受けた子どもの数 **26,376名**

[岩手: 17,540名、宮城: 6,906名、福島: 1,930名]

- 学用品や設備支援を受けた生徒総数/学校数  
**32,726名 / 634校**

[岩手: 10,380名、宮城: 21,621名、福島: 725名]

[岩手: 48校、宮城: 488校、福島: 98校]

「バック・トゥ・保育園/幼稚園」キャンペーン

- 備品や設備支援を受けた園児の数/園舎数  
**4,284名 / 73施設**

[岩手: 1,976名、宮城: 2,214名、福島: 94名]

[岩手: 38施設、宮城: 34施設、福島: 1園]

保育園・幼稚園再建支援プロジェクト

- 保育園・幼稚園に戻ることができた子どもの数 / 園舎再建支援を受けた園舎数  
**904名 / 14園**

[岩手: 225名、宮城: 585名、福島: 94名]

[岩手: 4園、宮城: 9園、福島: 1園]

## 支援活動実施地域および被災状況

### 岩手県

#### 【震災前データ】

- 0～15歳の子どもの数: 36,103名\*1  
そのうち0～6歳が13,217名
- 6歳未満の子どもをかかえるお母さんの数: 7,431名\*1  
注) 岩手県沿岸部12市町村

#### 【震災後データ】

- 震災による死者: 4,667名\*2
- 行方不明者: 1,368名\*2
- 0～19歳までの死者: 164名\*3
- 遺児および孤児の数: 遺児479名、孤児93名\*4

#### 【支援活動実施地域】

1 盛岡市 2 奥州市 3 一関市 4 花巻市 5 北上市 6 宮古市  
7 滝沢村 8 大船渡市 9 釜石市 10 久慈市 11 紫波町  
12 二戸市 13 遠野市 14 八幡平市 15 矢巾町 16 陸前高田市  
17 山田町 18 雫石町 19 洋野町 20 大槌町 21 岩泉町  
22 西和賀町 23 住田町 24 野田村 25 田野畑村 26 普代村

### 宮城県

#### 【震災前データ】

- 0～15歳の子どもの数: 141,059名\*1  
そのうち0～6歳が57,936名
- 6歳未満の子どもをかかえるお母さんの数: 35,770名\*1  
注) 宮城県沿岸部16区市町

#### 【震災後データ】

- 震災による死者: 9,472名\*2
- 行方不明者: 1,805名\*2
- 0～19歳までの死者: 617名\*3
- 遺児および孤児の数: 遺児712名、孤児126名\*4

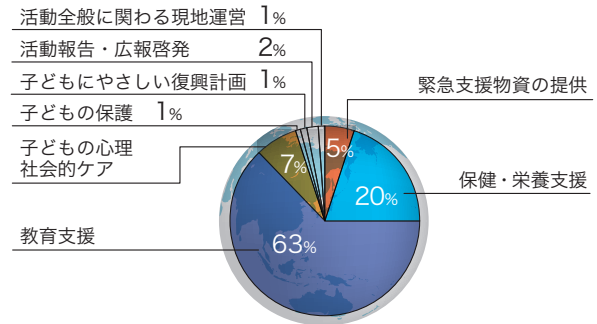
#### 【支援活動実施地域】

1 仙台市 2 石巻市 3 大崎市 4 登米市 5 栗原市 6 気仙沼市  
7 名取市 8 多賀城市 9 塩竈市 10 富谷町 11 岩沼市  
12 東松島市 13 柴田町 14 白石市 15 亶理町 16 利府町  
17 角田市 18 加美町 19 美里町 20 大和町 21 大河原町  
22 七ヶ浜町 23 涌谷町 24 南三陸町 25 山元町 26 丸森町  
27 松島町 28 蔵王町 29 村田町 30 女川町 31 川崎町  
32 大郷町 33 色麻町 34 大衡村 35 七ヶ宿町

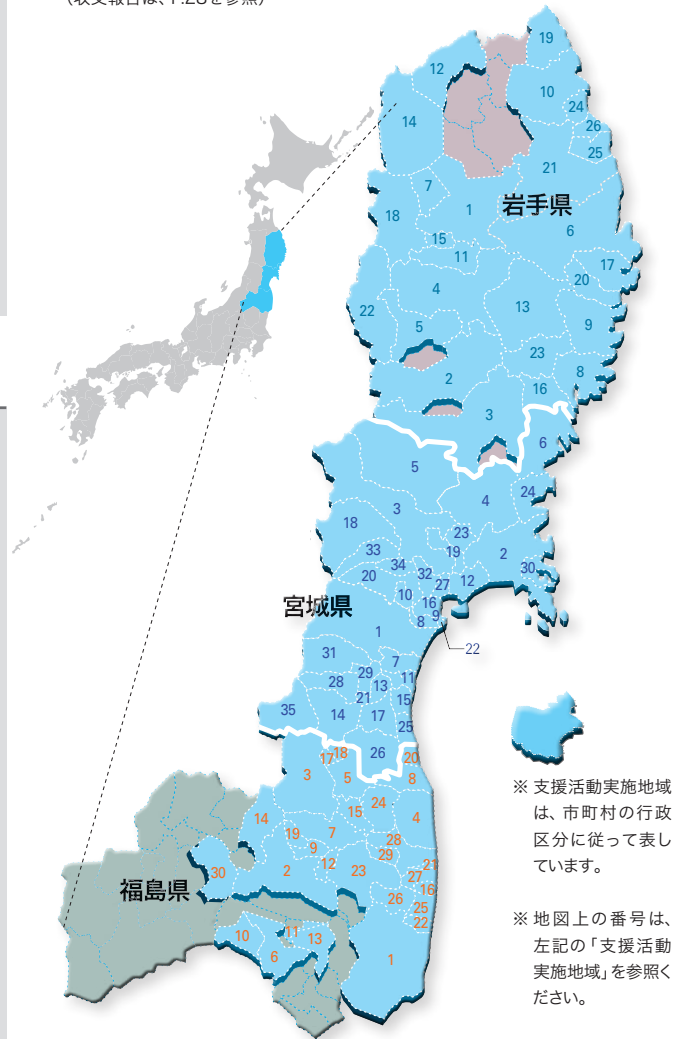
## 募金活動状況 (2012年1月31日現在)

日本ユニセフ協会に寄せられた東日本大震災緊急募金  
 国内から 2,683,593,541円  
 海外から 1,153,015,893円

### 活動分野別 募金使途(割合)



※ 募金使途の割合は、支出予定額を含む全体額から算出  
 (収支報告は、P.28を参照)



\*1. 平成22年度国勢調査より

\*2. 消防庁「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)について(第143報)」2012年1月13日発表より

\*3. 警察庁「東北地方太平洋沖地震による死者の死因等について(3/11～9/11)」平成23年9月15日 広報資料より

\*4. 厚生労働省、各県庁資料より(2012年12月時点)

### 心理社会的ケア

P.20

支援総額: 278,137,356円

- プレイセラピー講習会参加者数  
**1,520名** [岩手: 480名(34カ所)、宮城: 1,040名(40カ所)]
- 福島県臨床心理士会の心のケア事業に参加した親子の数  
**2,782名** (おとな1,318名、子ども1,464名)
- 『ユニセフ ちっちゃな図書館』プロジェクトで配布した書籍の数  
**約330,000冊**
- 『ユニセフ 子どもバス遠足』および『おもいっきり!そとあそび』に参加した親子の数:  
**44,658名** [岩手: 4,485名、福島: 40,173名]

### 子どもの保護

P.22

支援総額: 51,673,014円

- CAP(子どもへの暴力防止)ワークショップ参加者数  
**720名** (おとな313名、子ども407名)
- お父さん支援員研修受講者数  
**107名** [宮城]

### 子どもにやさしい復興計画

P.24

支援総額: 53,620,483円

- 活動対象地域の子どもの数  
**4,751名** [岩手大槌町、宮城女川町、福島相馬市の小・中学生]

## 福島県

### 【震災前データ】

- 0～15歳の子どもの数: 77,906名\*<sup>1</sup>  
 そのうち0～6歳が30,901名
- 6歳未満の子どもをかかえるお母さんの数: 18,144名\*<sup>1</sup>  
 注) 福島県沿岸部10市町

### 【震災後データ】

- 震災による死者: 1,925名\*<sup>2</sup>
- 行方不明者: 63名\*<sup>2</sup>
- 0～19歳までの死者: 98名\*<sup>3</sup>
- 遺児および孤児の数: 遺児139名、孤児21名\*<sup>4</sup>

### 【支援活動実施地域】

- |        |        |        |         |          |
|--------|--------|--------|---------|----------|
| 1 いわき市 | 2 郡山市  | 3 福島市  | 4 南相馬市  | 5 伊達市    |
| 6 白河市  | 7 二本松市 | 8 相馬市  | 9 本宮市   | 10 西郷村   |
| 11 矢吹町 | 12 三春町 | 13 石川町 | 14 猪苗代町 | 15 川俣町   |
| 16 富岡町 | 17 桑折町 | 18 国見町 | 19 大玉村  | 20 新地町   |
| 21 双葉町 | 22 広野町 | 23 田村市 | 24 飯館村  | 25 楡葉町   |
| 26 川内村 | 27 大熊町 | 28 浪江町 | 29 葛尾村  | 30 会津若松市 |

# 海に見える「美しいまち」を子どもたちへ

## 岩手県大槌町の復興まちづくり

池上 彰 × 碓川 豊

フリージャーナリスト

大槌町町長



© JCU/KO SASAKI

### 災害を後世に伝えていく取り組みが重要

**池上** 震災から1年経つわけですが、振り返ってみていかがでしょう。

**碓川** ガレキだけは分別しているんですが、このように荒涼たる風景ですし、仮設住宅で寒さをこらえている人たちのことを思うと、スピード感をもって一日も早く皆さんの希望に応えていかなければならないと身にしみて感じています。

**池上** スピード感とおっしゃいますと、当時の町長さんや役場の職員の方々がお亡くなりになられて、最初は身動きができない状態でしたね。

**碓川** 震災前には136名の職員がいましたが、そのうち町長以下33名が亡くなりました。8月28日に町長選があり、私はその夜に町長に就任しましたが、おっしゃるとおり当時は本当に何から手をつけたら良いのかわからないような状況でした。他町に比べて周回遅れのトップランナー的なところがあったので、9～12月をどう過ごすかが非常に大事だと考え、9月はまず組織体制を固め、その後の3ヵ月で復興計画を何としても作りたいと思いました。そこで、協議会を町内10ヵ所に置き、行政からはあまり口出しをさせないで、皆さんに自分たちの住む町をどうしたいのか考えさせることにしました。はたして12月までにまとまるかどうか、それは賭けだったわけですが、12月4日に全体集会を開き、提言していただきました。

**池上** どここの自治体も復興計画を作る上でいろいろ苦勞され

ているようですが、大槌ならではのポイントはなんでしょう。

**碓川** 地域の独自性を住民自身に考えさせる。それが原点だと思います。それを短期間でまとめさせるために協議会を作り、話を交通整理するコーディネーターとして東京大学の皆さんに尽力していただきました。私どもの町の赤浜という地区に東京大学海洋研究所があり、その縁で10の地域のコーディネーターをお願いしたんです。各協議会の会長さんはそれぞれの集落をお願いするわけなんです。これを募集でやっていただけでは時間がないので、私が指名してお願いしました。

**池上** 復興計画のポイントはどんなところでしょう。

**碓川** 大槌はなすびのような地形で、ヘタの部分が海に面しています。そのヘタの狭いところに、大槌川と小鮎川という両河川が並んで走り、太平洋にそそいでいます。その2つの川が交差するあたりが町の中心部だったところで、津波によって全部なくなった状況です。これから復興を遂げるためには、どうしても高台移転を考えなくてはなりませんが高台がありません。そこで、城山という100mくらいの急な山の真ん中を切って集落を作り、そこを中心にドーナツ型のまちづくりをしたいのですが、14年から15年かかると言われているんです。

**池上** その工事にですか。

**碓川** そうです。工事費も2,000億円かかると言われています。とても、なかなか……。

**池上** 現実的ではない。

**碓川** はい。震災以降人口の流失が続いていて、県下でもトップなんです。人間で言えば、体から血液が流れ出ている状態で、なんとしても包帯をしなければならない。

**池上** 出血を止めなければならないというわけですね。

**碓川** そうなんです。18社あった水産加工業者のうち2社が隣町へ行って、残りの16社は本格的な操業はまだ一切していない状況です。1社だけでも50から100名の雇用が発生するのですが、今はそれが全然ない状況です。大槌の漁協も破たんしましたし、もう待たなして雇用の創出をしなければならないのですが、水産加工団地を作るにしても地盤沈下していて、その工事の予算を獲得するのに見合ったものがなかなか見当たらず、忸怩たる思いで足踏みをしています。収入が



被災した大槌のまち並みについて説明する  
日本ユニセフ協会スタッフ

© JCU/KO SASAKI

途絶えると、子どもさんたちに対しての言動も厳しくなるのではないかという懸念もあります。

**池上** お子さんに辛くあたってしまうということですか。

**碓川** 盛岡の高校に進みたいお子さんも、親の収入の関係から地元に残らざるを得ない状況も出てきています。

**池上** 雇用の場が生まれれば、人口流失も止まる。お子さんに対して、親が厳しくあたることもない。雇用の場を作るって大事ですよね。

**碓川** 暮らしの根幹ですからね。

**池上** 高台に移転できないとなると、防潮堤を高くして、町の中心部だったところに皆さんは戻ってくるのですか。

**碓川** これから造る防潮堤の高さは14.5mで、明治29年と昭和8年の津波であれば防げますが、先の3.11の場合だと若干越流するんです。ですが、海拔1m以上の地域は頑強な建物であれば許可します。ですから、住民の皆さんは選択肢として戻るといこともできる。しかし、冠水しているところは、建築基準法第39条の規定にのっとり災害危険区域指定しなければなりません。

**池上** そこには、住んではいけないということですね。

**碓川** そこは公園緑地的なことをしていかなければいけません。私は鎮魂の森を造りたいと思っています。災害を風化させない取り組みが重要だと思うんですね。

**池上** さらに言うと、この悲惨な経験をどう後世に伝えていくかですね。

**碓川** そうです。私たちは後世に伝えていく責務があると思います。人口の1割弱が亡くなったということ、そして500名弱が行方不明であることをしっかり伝えていく責務があるわけです。

## 「スマートグリッド」「自治体クラウド」「ネット合併」「交流人口の拡大」が復興まちづくりのキーワード

**池上** これからのまちづくりということになりますと、未来を担う子どもたちをどう育てていくかも大きな課題ですね。

**碓川** 小、中学校あわせて7校のうち5校が被災し、今は仮設の校舎で一緒になって勉強していますが、被災前から学校の統廃合の話が出ていました。やはり5、6名の競争心のない複式学級という環境で育てるよりも、子どもさんたちがいっぱい集まるなかで勉強させることがより良いのではないかといいことで、小・中一貫校を考えていまして、昨日も議会の方で話し合いました。足がかりをつけているところなんです。

**池上** つまり、こういった災害をきっかけにいいものを作っていくということですね。

**碓川** ピンチをチャンスに捉える。今は白いキャンパスのようなもので、古い体質を締め出し、新しいまちづくりをしていきたいと思っています。

**池上** お子さんたちへの心のケアなど、課題が多いですね。

**碓川** 幼稚園から中学校までの子どもが27名も犠牲になっ



これからのまちづくりについて説明する碓川町長

© JCU/KO SASAKI

ておりますので、なんとかそのへんも考えなくてはなりません。

**池上** 幼稚園なども被害を受けてますよね。

**碓川** 被災前から統廃合の話が出ていたわけですけど、幼保一元化なども考えなくてはいけません。

**池上** 1年間を振り返ってみると、大変な被害を受けたことに関して、いろいろなところから救援といいますが、お手伝いがありましたね。

**碓川** 国内はもとより、海外からも支援を受けています。感謝の気持ちでいっぱいです。ユニセフにも、幼稚園の再建とか、心のケアとか、いろんな面でお世話になっています。ユニセフは将来を担う子どもたちへの心のケアを大変重要視しています。私たちも親をなくした子どもたちのことが心配ですが、被災当初からそういったこともフォローしていただいています。去年の夏に吉里吉里の吉祥寺というお寺の伽藍を借りて、子どもたちへの心のケアをどうしていくのかという座談会をやったことが忘れがたい思い出になっています。

**池上** 大槌の今後の課題は一刻も早く復興を成し遂げるということになるのですが、長期的に考えなくてはいけませんよね。

**碓川** 現実的なことを見据えて、少し遠くを見据えたまちづくりをしていかなければいけないと思います。現実的な対応とは、もとの居住地とか、面的な土地利用計画だと思うのですが、それはこれからの8年の間にやります。それ以降のまちづくり、その上の空間のまちづくりをどうするかが非常に大事ではないかと思っています。

**池上** まず8年で面を整備し、今度はその上に築くということですね。

**碓川** 同時並行していくべきでしょうけれど、今、職員が5つのプロジェクトを立ち上げて、それぞれ侃々諤々やっています。新しいまちづくりという視点からは「スマートグリッド構想」を立てて、国に対して補助金申請もしました。2、3年前から自治体クラウドにも興味を持っていました。今回役場が流れて、データも流されました。今後は自治体クラウドをやるべきだと思っています。

**池上** それぞれの自治体がサーバーを持つのではなくて、別の場所に置いて、みんなで利用するわけですね。

**碓川** そうです。同じ目的でありながら、それぞれの自治体がベンダーさんからパッケージとしてもらったものを、お金を

いけがみ あきら  
池上 彰

1950年生まれ  
フリージャーナリスト  
NHK記者として、警視庁、文部省  
(現・文部科学省)などを担当し、  
1994年から「週刊こどもニュー  
ス」に「お父さん」役で出演。『相手  
に「伝わる」話し方』(講談社)、『東  
日本大震災 心をつなぐニュース』  
(文芸春秋)など著書多数。ユニ  
セフのマンスリーサポーターであ  
り、支援者を代表して、岩手県大  
槌町を訪問。



© JCU/KO SASAKI

かけてカスタマイズするのではなく、自治体クラウドに参加する人たちが割り勘にしてやったほうがいい。いわゆる「ネット合併」にしたほうがいいというのが、私の考えなんです。

**池上** なるほど。市町村合併のような物理的な合併ではなく、データは全部別の場所に置いて、どこの自治体もそこからデータが取れるように、そして大切なものを保管できればいい。それが「ネット合併」ですね。

**碓川** そうです。今、国の借金が1千兆を超える状況のなかで、経費節減もしながら、消費税で被災地を救おうとしている。私たちもそれに応えなくてはならない部分があるんです。同じ法律、同じ目的で、みんなが費用をかけるのではなく、「ネット合併」すれば効率的ではないかということです。

**池上** スマートグリッドとは、具体的にどういうことですか。

**碓川** 震災後、大槌では1週間情報が途絶えたわけです。電気も通信も途絶えました。そこで公共施設の非常時の電源ということで、ソーラーや再生可能なエネルギーを重要視して、町のあらゆるところにエネルギーを蓄積する。そういうことをやっていきたいと考えています。

**池上** いわゆる「助け合い」ということでしょうか。円滑にエネルギーを共有していこうということですね。

**碓川** そうです。あとは中長期的な分野ですが、現実的な対応として、いずれ土地区画整理だとか、あるいは集団移転といったことがあります。更に、これからの空間的なまちづくりのキーワードとして、交流人口の拡大があります。少子高齢化社会では、定住人口は望めませんから。

**池上** 交流人口の拡大ですか。

**碓川** 観光客以外でも、なんらかのかたちで訪れる人を拡大しようと考えています。もう何万人というボランティアや、他市町村から1週間や1年間で交代する職員も来ています。東京大学と包括的なまちづくり協定をしようではないかという話も出ています。実は4、5日前にも東京大学の総長さんとお会いして、まちづくりの協定を結ぼうという話をしました。海洋研究所へは、内外からの研究生も結構な人数なので、その方々も大事にしよう。交流人口の拡大のため、まちづくりに参画してもらおうという話です。また、大槌には『ひょっこりひょうたん島』のモデルになった蓬莱島があり、「苦しいこともあるだるさ、悲しいこともあるだるさ、だけどぼくらはくじけな

いかりがわ ゆたか  
碓川 豊

1951年生まれ  
大槌町町長  
父親を早くに亡くしたため、子ども  
の頃より生計を助け、高校卒業後  
に大槌町役場に入庁。財政課、  
企画商工課、総務課などを経て、  
2010年12月に退職。震災直後  
よりボランティアや専門家との意  
見交換など積極的に行い、2011  
年8月の町長選に初当選、現在に  
至る。夫人は元保育士。



© JCU/KO SASAKI

い、泣くのはいやだ笑っちゃおう、進め!」というフレーズもあり、井上ひさし先生の吉里吉里国の話もある。そういうモチーフを生かしながら、やっていく必要もあります。私は復興計画のコンセプトとして、「海の見えるつい散歩したくなるこだわりのある『美しいまち』』というものを考えていまして、景観を大事にしながらまちづくりをやっていく必要があるのではないかと感じています。

**池上** たとえば自治体クラウドであったり、ネット合併であったり、あるいは交流人口であったり、その町にすべてを置いて復興させるのではなく、もっと広い意味での交流をしながら、復興を考えていくということですね。

**碓川** これから40～50年の間には、人口の3～4割が減ると言われています。そうすると、北海道と東北6県、北関東あたりがなくなるようなものですから、こういった地方の人口が増えていくということにはなっていない。そうであれば、やはり交流人口の拡大だろうと思っています。

**池上** 先ほど、町の人たちが復興計画を作っていくことが大切だとおっしゃられていました。町民の方、そして子どもたちに期待していきたいことは何でしょう。

**碓川** 計画を実行に移す段階で、総論賛成、各論反対というようでは、なかなか進まないこともあります。これからは、町民心をひとつにして進むことが大事だと思っています。それには、しっかりとしたまちづくりのイメージを出して伝えていく必要もあるし、今は大変辛い状況にある町民の皆さんにも、世界に誇れるようなまちづくりに協力してくださいという気持ちでいっぱいです。次代を担う子どもたちは、町の宝です。町の宝は、これからもしっかり磨いていかなければなりません。そのための環境づくりや政策はどんどん行っていきたいと思っています。

**池上** 最後に大槌を支援してくださった人たち、見守ってくださっている国内、世界の人たちにメッセージをお願いします。

**碓川** 今、我々は大変な状況でありますけれども、みなさんからいただいた心温まる支援に改めて、1日も早く復興計画を作って、復興を遂げたいと思っています。国内はもちろん、世界の皆さんに対して感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

**池上** お忙しいなか、本日はありがとうございました。



## 岩手県大槌町 みどり幼稚園

大槌町の北西部郊外に位置するみどり幼稚園は、大槌川を溯上した津波に2階部分までのまれ、震災直後に発生した火災による被害も受けました。地震発生時、すでに出発していた園のバス2台は、強い揺れが少し落ち着いた頃、園の災害マニュアルに従って一旦園に引き返しました。震災当時73名いた園児のうち約40名の園児が避難場所に指定されていた近くの高台にある大槌高校へ避難しました。

その後、4月27日より大槌高校の施設の一部を借りて再開を果たしたものの、長期で使用することは困難な状況になりました。日本ユニセフ協会は、みどり幼稚園からの要請をはじめ、岩手県の同意も受けて仮設園舎の建設支援を決定。2011年11月に着工し、2012年1月24日の3学期始業式を前に無事完成しました。2012年2月1日現在、51名の子どもたちが元気に通っています。



被災したみどり幼稚園の園舎。(左上) 園舎は5年前に建てなおしをしたばかりで、比較的新しい建物でした。(右上) (写真提供:みどり幼稚園)

完成した仮設園舎 © JCU/KO SASAKI



震災直後の様子について池上氏に説明する佐々木栄光園長 © JCU/KO SASAKI



元気な姿を見せる子どもたち

© JCU/KO SASAKI

## 大槌町を訪問して

—— 池上 彰 ——

この大槌町では、町長以下多くの職員の方が亡くなられて、復興計画がなかなかできないという状況があったわけです。碓川町長の指揮の下、復興に向けて少しずつ歩を進めていますが、こうした町の復興計画が幼稚園の再建計画にも影響しているのです。

町役場の後に訪問したみどり幼稚園は、ユニセフの援助によって別の場所に仮の園舎ができて、多くの子どもたちが仮設住宅から通っています。でも、そんなことを感じさせないくらい、みんな元気です。ユニセフと聞くと開発途上国の子どもたちを支援するというのが頭に浮かびますが、考えてみると世界中の子どもたちを健やかに育てるという目的で設立された国際連合総会の補助機関ですから、先進国も途上国も関係ないんですね。

被災した子どもたちの今は、世界中の人たちからの援助によってあります。私たちはひとりじゃない。日本も世界に支えられて存在しているんだということを、子どもたちが大きくな

った時に気付いてくれるとうれしいなと思います。

実は私も、小学校の頃は学校給食で、世界の援助で育ったということ、ある時に気付いたんです。小学校の時は、全然そういうことはわかりませんでした。ある程度大きくなって、自分たちは海外の援助で育てられたということに気付くと、いつか海外に恩返ししようと思うわけです。だから、この子どもたちも、幼い頃に助けられたから、今度は恩返ししようという気持ちを持ってくれるとうれしいですね。



みどり幼稚園の園児たちとともに

© JCU/KO SASAKI

## 保健・栄養支援

### 緊急フェーズの活動

東日本大震災後の2011年3月13日、日本ユニセフ協会は、国内での緊急支援活動の実施を決定し、被災各地の避難所などへの物流ルートを確認していた生活協同組合や、現地市民団体などの協力のもと、まず支援物資の確保と輸送、そして子どもの支援に関わる分野の専門家の派遣を行いました。救命救急の医療支援、保健衛生や栄養支援を優先して取り組みました。

### 乳幼児健診と予防接種支援

震災後は全国から医療援助組織が被災地に集まりましたが、その多くは外来診療を目的とするもので、乳幼児の保健事業までカバーされていませんでした。乳幼児健診と予防接種などの保健事業は、赤ちゃんを病気から守り、健やかな成長を見守るために欠かすことができません。

日本ユニセフ協会は、HANDSや日本プライマリ・ケア連合学会の協力を得ながら、岩手、宮城両県に住む乳幼児を対象とした乳幼児健診と予防接種などの支援を続けています。その一環として、これまでに身長計や体重計、診察台、メジャーといった健診道具一式のほか、太陽電池など3種類の電源で使用できる日本に1台しかない小型のワクチン保冷庫、また、地域の自治体の保健担当者が移動する際の車や原付バイクなどを被災各地の自治体に提供しました。こうした支援の結果、2011年6月までに両県では18の市と町で

27,000名を対象とした乳幼児健診が再開されました。

震災からひと月強が経った4月19日、生後4カ月と10カ月の赤ちゃんを対象とした震災後初となる乳幼児健診が、岩手県陸前高田市で再開されました。診査にあたったのは、陸前



大木智春医師



健診や予防接種を受ける子どもたち

高田市のわずか1名の小児科医である大木智春医師。もう1名の多くの子どもたちを診ていた内科医の先生、そして7名のうち5名の保健師さんが亡くなられたなかでの保健事業の再開となりました。大木医師はこれまでを振り返り、次のように話してくれました。

「私が勤めていた高田病院は4階まで津波にのみ込まれ、7月25日に仮設の診療所が完成するまでは米崎コミュニティセンターという所で救護所活動をしていました。4月19日に乳幼児健診が再開できたのですが、ユニセフの支援がなければあの時点ではたぶんできなかったと思います。乳幼児健診に必要な器具の全部を提供していただいたのはもちろん、毎回、健診や予防接種のたびに人を派遣していただき、市の健康推進課の保健師さんと一緒に手伝ってくれたのが本当に心強く、それはすごく助かりました。

市の担当職員の人からは予防接種も再開の見込みが難しいと聞いていたのですが、6月2日にはMR（はしか・風疹混合）ワクチンの予防接種が実施できました。復興の道のりは長いと思いますが、予防接種が再開できた時には『ああ、ここまで来たんだなあ』と感じました」



松木祐子さん

また、陸前高田市健康推進課副主幹の松木祐子さんは、「震災直後から、乳幼児健診や予防接種の問い合わせが多く入ってくるようになったのですが、避難者や支援者、救護所などの対応に追われ、何からどう手をつけたらいいのかわかりませんでした。成人の健診は後回しにしても、乳幼児の健診や予防接種を最優先にしたいということは話し合っていました。市役所が機能していなかったのと、これまでのデータやカルテが全部流失してしまい、対象者にどう周知したらいいものかと悩んでいたところ、ユニセフより7種類の周知ポスターとチラシの作製から展示、配布までしていただいたほか、様々なアドバイスとアイデアをいただきました。乳幼児健診と予防接種は6月から実施することができました。ユニセフの支援がなかったら、何も進まなかったかもしれませ

ん。おかげさまで、ここまで来ることができました。この支援を足がかりに、これから一歩ずつ進んでいきたいと思っています」と語ってくれました。



健康診査および予防接種の周知ポスター

## 南三陸町保健センター建設支援

宮城県南三陸町では、志津川地区と歌津地区にある、2つの保健センターが津波によって流失しましたが、それぞれ小学校の空き教室などを借りて、2011年6月より乳幼児健診を再開しました。

「備品もすべて流されてしまいました。ユニセフに身長計、体重計、じゅうたんなど、すべてを支援していただいたおかげで再開できました」そう振り返るのは、南三陸町保健福祉課の工藤初恵さん。南三陸町内の小学校の再編再開が進み、空き教室などの継続利用が難しい状況になりました。「保健センターは、乳幼児健診が行われるだけでなく、遊びの広場として活用するなど、お母さんと子どもたちが気軽に集まれる場でした。保健センターがなくなり、みんなで集まって話したり、保健師や栄養士、保育士に相談



南三陸町の保健師、工藤初恵さん

したりする場所がなくなって残念だという声を聞くようになりました」と工藤さん。

母子の健康を守る重要な場として、住民から保健センターの早期再建が望まれるなか、2011年11月、日本ユニセフ協会は南三陸町の要請を受け、この2つの保健センターの再建を支援することを決定しました。2012年3月末完成を予定に進められています。



志津川保健センターの建設地

## 子どもと保護者を対象とした歯科保健活動の支援

震災の影響で、生活のリズムや食事が変化したことなどによって、子どもの虫歯の増加が懸念されています。宮城県石巻市では、保健所から派遣された歯科衛生士などが、仮設住宅の集会所、保育園や社会福祉施設などを訪問し、歯磨きなどの指導を行っています。日本ユニセフ協会は、参加した保護者と子どもに配布される、歯ブラシをはじめとする歯科用品を支援しました。2011年6月から12月の間に、1,464名（おとな367名、障害児を含む子ども1,097名）が支援を受けました。

## 産婦人科医師派遣プロジェクトを支援

大きな被害を受けた宮城県石巻地区では、5カ所ある産婦人科医院のうち、辛うじて被害を免れた石巻赤十字病院を除き、残り4カ所の産婦人科医院が深刻な津波の被害を受け、そのうち2カ所が廃院に追い込まれました。



あベクリニック産科婦人科  
理事長 阿部洋一医師

あベクリニック産科婦人科は、被災した4カ所のうちの1つで、理事長の阿部洋一医師1名とスタッフ25名で運営を行っていました。震災で阿部医師のご自宅が半壊し、奥様とともに、クリニックの病室で避難生活をしながらクリニックの復旧作業を行いました。1階の診療室は浸水被害で使用できないため、2階での診

療ができるように、同じくクリニックに避難した2名の助産師とともに片付けや泥出しの作業に奔走しました。阿部医師は、「一時はクリニックの再開を諦めようと思ったこともあります。しかし、震災から3日後の浸水が引いた頃、再開はいつになるでしょうかと、わざわざ当院まで歩いて聞きにいらっしゃる患者さんのご家族の姿が見られるようになりました。そして、2カ所が廃院になったということを知り、なんとでも再開しなければと、無我夢中でした」と当時の様子を振り返ります。

奥様の登喜子さんは、次のように話しています。「2011年3月11日は、当院の創業24周年に当たる日でした。スタッフみんなでお赤飯を食べてお祝いをした後に、震災が起きました。全スタッフの約3分の2が、深刻な津波の被害を受けました。そのような状況であっても、患者さんのために早く再開したいという気持ちがあったからこそ、早期再開ができたのだと思います」

阿部医師は、クリニックの復旧作業に加え、外来診察、被災した自宅の片付けなど、不休の日々が続き、心身に大きな負担を抱えていました。そのことを受け、震災直後から、宮城県と福島県の被災した母子を対象とする医療支援活動とともにやってきた日本プライマリ・ケア連合学会と連携し、あベクリニック産科婦人科への産婦人科医師派遣を支援しました。6月末から10月中旬までに11名の医師を派遣し、その業務の総時間は370時間となりました。

「ベテランの先生方を派遣していただいて、大変助かりました。ユニセフの支援が終わった今も、先生方との関係はつながっています。私たちよりも、もっとつらい、大変な思いをした方はたくさんいらっしゃると思います。ですから、私たちが支援を受けてもいいのだろうかと感じたこともあります。いつか、アフリカの子どもたちなど、世界で困っている人々に恩返しできればと思います」と、阿部医師は結びました。

## インフルエンザ予防接種の費用を助成

震災後の食生活の乱れやストレスなどから子どもたちの体力と免疫の低下が想定されるなか、予防接種が「新型インフルエンザ」とされた過去2年間のように公的な助成金が下りないこと、また家庭の経済状況もきびしいことなどから、2011年の冬は、子どもたちのインフルエンザ流行が懸念されました。そこで日本ユニセフ協会は、岩手、宮城、福島各県沿



「インフルエンザ予防の助成は、非常にありがたいお話でした」と語る新家利一所長

岸部の29市町村に住む生後6ヵ月から中学生までの子ども最大16万名を対象としたインフルエンザ予防接種の支援を行いました。

福島県いわき市保健所の新家利一所長は、次のように話してくれました。

「ユニセフからの支援は、とてもありがたいお話でした。福島県には、原発事故の影響を心配して、外に出

て遊びたくても遊べないような子どもさんもいらっしゃるようです。屋内だけでは運動量が下がりますので、やはり体力も落ちるし、免疫も下がる。そうすると体調を崩すことも多くなります。また、校舎が被災して使えなくなった学校からの編入により、人数が増えている学校もあります。基本的に感染症というのは人から人うつるものなので、やはり人が多ければ感染の確率は上がってしまいます。

そういった状況でしたので、インフルエンザの感染予防においては、非常にいいお話をいただけたと思いました。おかげさまで、各医療機関の先生方からも、助成があった分、接種率はかなり上がったというお話を聞いていますし、重症化をいくらかでも抑えられたと思います。

支援が実施されたのは2011年10月1日から2012年2月29日までで、各自治体で実施されたインフルエンザ予防接種活動において、市町や医師会等を通じて接種1回あたり2,000円を助成し、約3.5億円の予算を進めています。

また日本ユニセフ協会からの助成と合わせて、釜石医師会、宮古市（以上岩手）、新地町、相馬市（以上福島）などのように子ども対象に追加助成を決定した地域もあります。



石巻地区でのインフルエンザ予防接種助成申請手続き会場にて

## 未就学児を抱える家庭を対象とした食生活指導と調査の実施

震災後の子どもたちの栄養摂取状況を懸念し、HANDSおよびいわて生活協同組合の協力のもと、被害が甚大であった岩手県陸前高田市、大槌町、山田町の3市町で保育所などを対象として3ヵ月の補食（おやつ）支援をすることになりました。同時に、山田町では、行政と青森県立保健大学と日本ユニセフ協会の間で事業契約を結んだうえで、震災による子どもたちの食生活への影響を調査しました。

2011年6月上旬から11月末まで管理栄養士を山田町に派遣し、保育園を巡回して、補食支援活動の実施と調整のほか、避難所や仮設住宅を訪問し、子どもの食生活のモニタリング、保護者への栄養指導などを行いました。また、震災前と後の食生活に関するアンケートを実施し、『子どもたちの食生活通信』にて紹介し、保育園等を通じて保護者に配布しました。その結果をもとに分析を行い、未就学児を抱える保護者や、行政にアドバイスを行っています。

山田町役場の一員として活動に従事した青森県立保健大学の岩岡美佳さんは、「震災後は、多くの方がレトルトやインスタント食品に頼りがちの食生活を送っていましたが、流通が整備されて、スーパーなどが再開した8月以降は、子どもたちの食生活も改善してきています。ただ、親を失った子どもたちは、体重が減っていたり、身長が伸びているのに体重は変わらないなどの傾向が見られ、今後の栄養摂取状況が心配です」と話してくれました。そして、「どんなにきびしい状況であっても、子どもたちは待ったなしで、日々成長していることを実感しました。日常の子どもたちの食事管理は、保護者の方が心や体に余裕がなければできません。具体的にどのように管理していけばいいのか、簡単に調理できる料理のレシピなど、実用的な情報を提供することに努めました」と、支援活動を振り返りました。



配布された『子どもたちの食生活通信』。9月30日に発行された第1号では震災直後と半年後の子どもたちの食生活の違いや気になる点などの調査内容を紹介しています。

## 福島県双葉町の子どもたちへの朝食支援

埼玉県加須市にある旧騎西高校では、福島第一原発のある双葉町の方々が避難生活を送っています。日本ユニセフ協会は、双葉町からの要請に応え、2011年4月25日から避難生活を余儀なくされている子どもたちへの朝食支援（牛乳、野菜飲料、ヨーグルト、パンなど）を実施しています。当初、双葉町からの支援要請期間は9月末まででしたが、町へ帰る見通しが立たないことから今も朝食支援は続けられています。

「旧騎西高校に移転してきた当初は、約1,400名のうち高校生までの子どもたちが200名近くいました。4月8日に騎西小中学校の入学式がありましたが、町長から新学期を迎える子どもたちにはきちんとお味噌汁を飲ませて、朝ごはんをしっかり食べさせて登校させなければいけないという話がありました。そこで、毎朝、副食として汁物を出すことにしたのですが、その食材の調達をどうするか、ストレスと野菜不足が原因と思われる口内炎などの症状が出ている子どもたちに、牛乳を飲ませたいといった話が出ました。当初は地元のスーパーで購入していたのですが、さいたまコープを通じてユニセフが支援してくださるという話があり、今日に至っています。今は少し落ち着きましたが、振り返ってみると4月の混乱期にはたくさんの子どもたちがいて、乳製品を提供したくてもできなくて、本当にユニセフの支援は助かりました」。そう語るの



「必要な時に必要なものを支援していただけて感謝しています」と語る小野田真澄さん

は、双葉町教育委員会の小野田真澄さん。近隣の借り上げ住宅に移転した人たちもいますが、2011年12月の時点で約560名（うち子どもは40名）が旧騎西高校で避難生活を送っています。日本ユニセフ協会では、今後も朝食支援を続けていく予定です。



朝食時に乳製品を配布する様子

## 石巻市の小中学校に食器を支援

宮城県石巻市に6カ所あった給食センターは、地震による被害で3カ所が使えなくなりました。そのうち沿岸部に並んで建っていた渡波学校給食センターと湊学校給食センターは津波にのまれ、建物は半壊し、設備は流失しました。そのため、学校給食の提供ができなくなりました。

「4月25日から給食を再開したのですが、当時は食材を集めることも、調理をすることもできないような状態でしたから、宮城県のほとんどの小中学校がパンと牛乳だけでした。石巻市では、その後被害を免れた3カ所の給食センターをフル稼働して、6月1日からレトルトをボイルした給食を出せるようになりました。そして、損傷していた給食センターの修繕を終え、2学期からは4カ所の給食施設が稼働するようになって、レトルトから本来の調理品に戻りました」。そう語るの



「給食を通じて受けた支援を忘れずに、思いやりのあるおとなになってほしい」と語る佐藤勝治さん

石巻市教育委員会の佐藤勝治さんです。2学期から調理品が提供できるようになったとはいえ、おかずは1品だけで、10月になってやっと2品に増えたといいます。しかし、震災前の給食は汁物とおかず2品の計3品で、まだ本来の給食には戻っていないのが現状です。その背景には食器がないことや、食器を洗浄し、消毒保管するスペースが足りないことなどがあります。その

ような状況から、日本ユニセフ協会では、石巻市の小中学生15,000名分の食器を提供することを決定し、新年度から利用できるように準備を進めています。

「給食は、子どもたちにとって楽しみの1つだと思います。2012年4月から、給食の品数を災害前の3品に戻せるように、いろんな面で改善を進めています。ユニセフからは、そうした給食を提供する食器を支援していただくことになり、感謝の気持ちでいっぱいです。食器にはユニセフのロゴが入るのですが、支援をいただいて本来の給食がまた食べられるようになったということが、子どもたちにも伝わると思います。今も世界中からいろんな支援をいただいています。そのことを忘れずに、将来は支援する側として、恩返しできるようなおとなになってくれたらいいなと思います」。佐藤さんは、そう続けてくれました。



ユニセフのロゴ入り食器

# 教育支援

## バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）

日本ユニセフ協会は、学校再開のための支援として文房具や学校用の備品などの提供を軸にした「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーンを展開してきました。その第1弾として2011年4月初旬から5月末までに岩手県内の小中学生17,540名分、宮城県内の小中学生6,906名分、福島県内の小中学生1,930名分のノートと文房具のセットを届けました。また、被災校にはコピー機やプリンター、パソコンなどのOA機器を提供しました。

その後も、岩手、宮城、福島各県の教育委員会や学校からの要請に基づいて、体操着や書道セット、裁縫道具、リコーダー、算数セットなど、授業に必要な様々な学用品や副教材、また、備品や機材を提供。2012年1月末までに、総額5億円以上（輸送費を含む）相当の物資を「バック・トゥ・スクール」のために支援しました。



仙台市内の倉庫にて、文房具等をユニセフのバッグに詰めるボランティア

### Report 1 山田町立船越小学校（岩手県）

船越半島に位置する岩手県山田町立船越小学校では、地震発生後、教職員の適切な判断により子どもたちは校庭裏の山の上に誘導され、全員が難を逃れることができました。しかし、その後に襲来した津波は校舎の1階部分をのみ込み、教室の机や椅子、職員室の備品などをことごとく流し去りました。校舎は使用不可能な状態で、船越小学校から6km程離れた山の上にある『県立陸中海岸青少年の家』に場所を借り、2011年4月25日には始業式を、翌26日には24名の新1年生を迎えて入学式が行われました。

当初、青少年の家には、大槌町で被災した大槌小学校も間借りしていました。施設の部屋を分け合って教室として、体育館も2校の職員室と大槌小の3つのクラスが間仕切りをして使用しました。また、宿泊棟には被災者の方々が避難生活を送られていました。避難されていた方々は8月下旬には

仮設住宅などに移り住み、大槌小学校も町内に合同仮設校舎が建設されたため、9月16日にはお別れ会が行われ、無事引っ越しました。しかし、船越小学校は現在も青少年の家で授業を続けていて、子どもたちはスクールバスで通学しています。

「校舎は海拔12mに建っていたのですが、1階部分が津波でやられ、職員室の備品や機材も含め、何もかもが流されました」と佐々木道雄校長先生は、当時を振り返ります。17mの地点に到達したともいわれる津波の威力によって、校内の天井は抜け落ち、体育館の床板は波を打つほど被害を受けた船越小学校。年が明けた2012年1月の下旬には被災した校舎の解体作業が進み、船越湾を臨む景色から学校の建物が消えました。

山田町は、船越小学校の新校舎を現校舎の裏山を造成して、海拔21mの高さに建設することを計画しています。「2014年4月開校を目指していて、それまではこの青少年の家で授業を続ける予定です。この1年、ユニセフをはじめ、国内外から支援をたくさんいただきました。心からの感謝の日々です。被災した学校にはすずかけの大木があるのですが、津波にも負けずに枝を伸ばし、葉を広げています。船越の子も、すずかけの木に負けないようにぐんぐんと伸びていってほしいと思っています」と佐々木校長先生は、今後の見通しを語ってくれました。そして、教務主任の金澤充枝先生は次のように話してくれました。



教務主任の金澤充枝先生

「9月末から職員室らしくなりましたが、ここにある備品はユニセフからの提供がなければ揃えられないものばかりでした。震災直後は命があればなんとでもなると思っていたのですが、それは思い上がりで、やはり教える場所であったり、教材などがなければ教えられないなと痛感しました。運営はしなければいけないのに、本来通りにできないもどかしさがあったのです



津波にも負けずに枝を伸ばす「すずかけの木」



被災した体育館。壁は崩れ、床板は波打つように盛り上がり、床下の柱が飛び出している。



仮校舎で勉強を続けている5、6年生。震災以降、公園などがれきが積まれて立ち入り禁止になり、「思いっきり遊べる場所がほしい」というのがみんなの切実な願いだ。左から佐々木那緒登、佐々木友花（後列）、富山浩恵（前列）、山崎美波、金濱智紗都、山崎光平、佐々木道雄校長（敬称略）。

が、文房具をはじめ、1、2年生分の机や椅子も提供していただいていた助かりました。それから暑くなった時に各教室に扇風機を取り付けてもらって、子どもたちも集中して勉強することができました。教室は確保できたのですが、思い切り体を動かすことができる場所を、なんとか確保してあげられないかというもどかしさがあります。子どもは勉強だけでなく、読書とか運動など、情操面に役立つことが大切なんです」

そんな心配をしている金澤先生の話の横で聞いていた子どもたちは、「運動なら相撲を取ったり、坂道でかけっこもしているよ」と笑顔を見せてくれました。

## Report 2 女川町立女川第二小学校（宮城県）

女川町は震災被害の大きかった地域の1つで、女川第二小学校では児童の約9割が震災で家を失い、仮設住宅や親類の家から通学しています。震災から間もない3月下旬、日本ユニセフ協会は教育委員会や先生方と調整しながら、被災した子どもたちのためにランドセルや文房具などの準備を進め、



左から鈴木健矢、阿部清司教頭、中村真鳳（敬称略）。

4月12日には沿岸部の被災地で第1号となる入学式と始業式を迎えることができました。学校再開に向けて準備を進めてきた阿部清司教頭先生は、「3月の後半にユニセフから学校生活をスタートするうえで必要な物をリストアップしてくださいという申し出をいただきました。どこまで支援できるかわかりませんが、結果的にすべての物を支援していただきました。新1年生のランドセルはもとより、体操着であったり、上靴も外靴もちょうだいしました。それから、6年生は山形交通の支援で山形に遠足に行きましたが、1年生から5年生まではユニセフの支援で仙台市にある八木山動物公園に連れて行っていただいて、楽しい思い出になったと思います」と話してくれました。

「徳島に行って、さざ波太鼓を披露したことが楽しかった」そう語るのは6年生の鈴木健矢くん。さざ波太鼓は10年前から5年生と6年生が続けている芸能活動で、太鼓や衣装を津波に流されたものの、徳島商業高校の支援を受けて再び道具を揃えて復活を遂げました。そして、6年生33名が12月11日に徳島県で開催された東北と徳島の芸能祭典『KIZUNAフェスティバル』に出演し、復興を誓う勇壮な太鼓の音を響かせました。同じく6年生の中村真鳳さんは、「何日も同じ服を着ていたし食べる物もなかったから、衣類とか食事とか、そういう日常に必要な物をユニセフやいろんな所からももらったことがうれしかったです。友達のお母さんとかいるんな人たちに助けってもらいました。だから、おとなになったら自分にできるボランティア活動をしたいと思います」と将来の抱負を語ってくれました。



4月12日に行われた入学式・始業式の様子



始業式で、支援された文房具セットを受け取った子どもたち

## 保育園・幼稚園再建支援プロジェクト

日本ユニセフ協会は地震および津波により被災した岩手、宮城、福島各県の自治体からの要請を受け、保育園・幼稚園の仮設・恒久園舎の建設や大規模な修繕のための支援活動を行っています。震災前よりも安全で安心なより良い保育園・幼稚園をつくるため、『子どもの参画・子ども中心の環境づくり』『あたたかみとぬくもりを感じる保育空間づくり』『自然・地域とのつながりづくり』の基本理念に基づき、園の先生や保護者のみなさま、そして子どもたちの要望を取り入れながら多岐にわたる支援を実施しています。

地域	園名	園児総数	進行状況(完了予定月)
岩手	大槌保育園(大槌町・私立)(仮設)	64名	2011年5月末完成
	吉里吉里保育園(大槌町・私立)(仮設)	50名	2011年8月中旬完成
	みどり幼稚園(大槌町・私立)(仮設)	51名	2012年1月中旬完成
	竹駒保育園(陸前高田市・私立)(仮設)	60名	2012年3月末完成予定
宮城	ひまわり保育園(石巻市・私立)	70名	2011年11月中旬完成
	牡鹿第一保育所、牡鹿第二保育所(石巻市・公立)	35名	2012年6月末完成予定
	井内保育所(石巻市・公立)	90名	2012年7月完成予定
	気仙沼市マザーズホーム(気仙沼市・公立)	35名	2012年7月完成予定
	一景島保育所(気仙沼市・公立)	90名	2012年7月完成予定
	あさひ幼稚園(南三陸町・私立)	40名	2012年7月中旬完成予定
	ふじ幼稚園(山元町・私立)	80名	2012年7月末完成予定
	葦の芽幼稚園(気仙沼市・私立)	70名	2012年8月完成予定
	吉田保育所(亘理町・公立)	75名	2012年8月末完成予定
福島	三宝保育園(いわき市・私立)(仮設)	94名	2011年11月中旬完成

### Report 1 大槌保育園(岩手県大槌町)

町内で一番大きな保育施設であり、子育て支援センターの機能も兼ね備えていた大槌保育園の平屋建ての園舎は、天井下10cmという高さまで浸水しました。建物は残りましたが、施設内にあった備品や機材は流出、壁や床下への浸水被害は深刻でした。大槌保育園の職員やボランティアの方々によって、園舎や園庭の掃除、泥出しも行われましたが、保育園があった場所は危険区域に指定される可能性があったため、園舎の修繕や仮設の建設に対して、行政からの許可が下りませんでした。結局、別の場所に仮設園舎を建設し、保育を再開するしか方法はなくなりました。

そのような状況のなか、日本ユニセフ協会は、2011年4月上旬から大槌保育園や自治体の関係者らと何度も協議を重ねました。大槌保育園では、津波の被害を受けた園舎から内陸に3kmほど離れた場所に土地を準備し、自治体からも再開

についての賛同が得られたため、日本ユニセフ協会は保育活動の再開に必要な備品などの供与とともに仮設園舎の建設を支援することを決定しました。

しかし、仮設園舎建設が決定した5月頃は、仮設住宅の建設などによりプレハブ用資材の入手は容易ではありませんでした。建設を担当した岩手県遠野市の建設業者の方々も大槌保育園再開の重要性を理解してくださり、資材の確保や建設作業に最優先で取り組んでくださいました。このような多くの方のご協力があり、6月1日、大槌保育園は約80日ぶりに保育活動を再開しました。

「被災した本園舎は、津波でなかは全部流されたような感じですけど、建物はしっかり残っているんです。建設会社に調べていただいたら、耐震も100パーセント大丈夫だし、改修さえすれば使えるよと言われたのですが、行政の許可が下りなかったんです。お仕事を持ってらっしゃるお母さんたちもけっこう多かったですし、子どもは待たなしたので、保育を再開できる場所はないかといういろいろあったのですが、結局見つかりませんでした」と、園長の八木澤弓美子先生は、当時を振り返ります。

「そこで、理事会を開いてもらいました。本園舎は建てたばかりだったのですが、お金を借りてでも仮設園舎を建てようと理事たちが言うてくれました。でも、借金を返していくめどがつかず、経理は頭を抱えていました。そんな矢先に、以前から相談をしていたユニセフから大槌保育園の仮設園舎建設を支援させていただくことになりましたというお話をいただきました。その言葉に感激して、涙が止まりませんでした」八木澤先生は思いだすたびにうれしくて、今でも涙が出ると言います。

「おかげさまで、一部工事が残ってはいましたが、6月1日から仮設園舎での午前保育が再開できました。8月1日からは通



仮設園舎での保育再開準備を進める先生や職員



建設中の仮設園舎



園児たちを元気に育てる決意を示す園長の八木澤弓美子先生(再開した仮設園舎にて)



常通りに戻し、9月1日からは給食も出せるようになりました。震災から1年が経とうとしていますが、なかなか落ち着いたとは言えません。でも、子どもたちも職員も日常的な会話は普通に交わせるようになりました。ユニセフをはじめ、ボランティアで来てくださったみなさんの期待に応えるためにも、園児たちを元気に育てたいと思います。子どもたちを大きくすることが町の復興にもつながりますから」大槌保育園の仮設園舎建設や再開を振り返り、八木澤先生は感謝の気持ちを述べるとともに、将来の抱負について語ってくれました。

## Report 2 吉里吉里保育園（岩手県大槌町）

創立52年の歴史がある吉里吉里保育園は、船越湾に面する海岸にほど近い場所にありました。2階建ての園舎は津波によって全壊・流失。園の再開は絶望的でした。2011年3月30日にろうそくの火を灯したなかで行われた理事会では、今後の方針について話し合いが行われたそうです。

「園を存続させることは非常に難しいと感じていましたが、園の再開をいつまでも待っていますという保護者の言葉に支えられました」と被災当時を振り返るのは、園長の芳賀明美先生です。

「子どもたちだけでなく、職員もまた非常にきびしい生活を続けていましたから苦労の連続でした。18名いた職員のうち13名が被災し、避難所や実家、親戚の家などを頼る生活をしていたため、全員が復帰することはできませんでした。

結果的に4月18日から園児26名、職員10名で仮保育を再開しました。最初は民家の1階で、6畳と8畳の二間を使わせてもらいました。部屋は子どもでいっぱい、事務的な仕事はほかの場所でしていました。

民家での保育は、スペース的に十分でなかったため、並行して別の場所をあたっていたのですが、広いスペースがある建物はすべて避難所として使われていてダメでした。そんな折り、震災後、避難所として使われていた吉祥寺三光殿から、100名ほどの被災者の方が仮設住宅や新しい避難先へ移動したというのを聞き、5月9日からお借りすることができました」

お寺で借りたスペースは広く間仕切りもないため、32名に増えた子どもたちが元気に過ごしている横で、園長先生も一緒にお仕事ができ、「子どもたちから元気をもらえました」と笑顔でお話されます。「御住職は『いつまでいてもいいですよ』とおっしゃってくださいましたが、お寺は地域の方がお葬



被災した旧園舎



完成した仮設園舎

式や法要で使う所ですから、長くは借りることができませんでした」と話す姿からは、当時の複雑な思いが伝わります。

「そこで、4月上旬より仮設園舎建設支援を相談していた日本ユニセフ協会から、『まず園のほうで土地を確保してください』というお話をいただきました。土地探しは非常に苦労しました。やっとの思いで見つけたと思ったら、重機が入らないなどの理由で諦めざるを得ないこともありました。苦労の末、地元の方の私有地を5年間お借りできることになり、建設予定地が決定したのです。

ユニセフの支援が決まった時は、ほっと胸を撫で下ろしました。できあがった仮設園舎の広さは、90名収容できた元の



ウッドデッキづくりに取り組む子どもたち

園舎に比べると4分の1のスペースしかありませんが、子どもたちがウッドデッキづくりを手伝ったり、完成までの様子を見つめてきたことが、新しい園舎への愛着につながっています」。

暑い8月に新しくできあがったプレハブ園舎のなかで子どもたちに「これが新しいみんなの保育園だよ」とお話しされていた芳賀園長先生。

「それまでは、お寺さんでは『おてらのほいくえん』って呼んでいたんです。だけど、仮設でも『きりきりほいくえん』ですから、子どもたちは卒園しても、ここが私たちの保育園だったと心にとどめると思います。

10月に行われたおゆうぎ会では、将来は自衛隊や警察官になりたいと発表した子どもたちがいました。子どもなりに、彼らからたくさんの支援をいただいたことに感謝しているのだと思います。自分たちが受けた支援を当たり前のことと思わずに、感謝の気持ちを持って、将来、人のために役に立つようなおとなになってほしいと思います。私たち職員も、子どもたちや周りの人たちに支えられて、今日まで乗り越えてきました。子どもたちと一緒に笑いあえる毎日がエネルギー源となっています」芳賀園長は、続けてそう語ってくれました。子どもたちも、職員のみなさんも、毎日元気に過ごしていっしやいます。

### Report 3 あさひ幼稚園(宮城県)

津波により建物が流失した宮城県南三陸町のあさひ幼稚園は、現在、同町入谷にある大船地区公民館を間借りして園児47名を保育しています。日本ユニセフ協会は、南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナ近くの町有地に仮設園舎の建設を進めています。「園舎を建てる場所もなく、また、前の園舎のローンに加えて負債を抱えられる状況にもなくて、被災直後は再建の見通しはありませんでした。そんな折り、以前からご相談をしていたユニセフから、支援を決定したというご連絡があり、前に進むことができました。私たち職員も震災当初は気持ちの落ち込みが激しかったんです。その原因は家を流されたこともあったのですが、職場を失い、将来の見通しが全く立たないことでした。再開に向けて走り出すと、子どもたちの声もダイレクトに届いてきて力をもらえました。子どもに慕われる、頼ってもらえているという想いが力になり、生きる糧になっているとあらためて実感しました。



「働けることのありがたさを再認識しました」という遠藤ゆみ子先生

被災後、散り散りになっていた園児たちが顔を合わせたのは2011年6月10日でした。ユニセフの提案で、園児とお母さんに参加してもらい、理想とする幼稚園の模型をつくるワークショップを開催しました。建設が進んでいる園舎は、木のぬくもりのある園舎にしたいという設計士の手塚貴晴さんと園長の想いが一致して、京都の清水寺のようなイメージの建物を提案していただきました。園長は大雄寺というお寺の住職ですが、参道の杉並木が津波の被害にあったんです。設計士の方がその参道とお寺を見た時に、南三陸町を象徴する風景だと感じると同時に園舎のイメージも浮かんだそうで、杉の木が傷んでしまう前に資材にして建物の一部に利用しようという話になりました。

今回、震災で失ったものは本当に多いのですが、ユニセフをはじめ全国津々浦々のみなさんから支援をいただいて、本当にありがたく思ってい



園舎のイメージ図(写真提供:株式会社手塚建築研究所)



震災から約1ヵ月後(2011年4月15日)、志津川駅方面より撮影された、あさひ幼稚園園舎の被災状況(写真提供:あさひ幼稚園)



在りし日のあさひ幼稚園(写真提供:あさひ幼稚園)

ます。新しい園舎ができれば、今まで支援して下さったみなさまに、おかげさまで子どもたちはこんなに元気ですという感謝の気持ちを伝えたいです」と、事務主任の遠藤ゆみ子先生は、話してくれました。

### Report 4 気仙沼市マザーズホーム(宮城県)

1974年に重症心身障害児者施設として開所された気仙沼市社会福祉協議会マザーズホームは、1983年に一景島保育所の敷地内に移転しました。2006年度からは障害者自立支援法・児童デイサービスの施設として指定管理体制による運営が開始されました。マザーズホームと一景島保育所のあった場所は直線距離にすると海からわずか300mほどの距離しかなく、津波によって2つの施設の建物は全壊・流失しました。

この状況を受け、日本ユニセフ協会ではマザーズホームと一景島保育所の園舎の建設支援を決定し、2012年7月1日からの開所に向けて2施設の建設を進めています。

「震災の影響で大きなパニックになったり、ドクターの診断を受けないといけなくなった子どもはいませんでしたが、やはり環境が変わると不安なために多動になったり、大きな声を上げたりするので、避難所では生活できず、車のなかで過ごしたという声も聞きました。そんなこともあって、新しい施設には、調理室をぜひ設けていただきたいとリクエストをしまし



園長の内海直子先生



在りし日の一景島保育所(マザーズホームは保育所に隣接して建てられていた)(写真提供:気仙沼市)



被災後の写真(写真提供:気仙沼市)

た。子どもたちの活動のなかで、材料を揃え、調理し、食べるという物事の展開の順序が学べるクッキングは、とてもいい活動です。それにお母さんたちも気軽に集まれますからね。万が一震災があった時に避難先としての利用が可能かとも思います。そういった意味では、今度の園舎はホールも広いので、そこに寝泊まりしながらクッキングもできて、安定した避難生活が送れるので、緊急時の拠点にもなり得ると思います。

今は老人福祉センターの2階を間借りして、幼児12名と小学生25名を預かっていますが、ケガが心配で思いっきり走らせたりはできません。新園舎に移ったら子どもたちをのびのびと遊ばせたいと思いますし、お母さんたちにも自主的な活動を展開していただいて、心豊かに自分の子どもの障害を受け入れて生きてもらえればいいなと思っています」園長の内海直子先生は、そう語ってくれました。

### Report 5 三宝保育園 (福島県)

福島県いわき市にある三宝保育園の園舎は、地震によって激しく損壊し、壁や床には無数のひび割れが生じました。また、園庭には地割れが生じ、液状化現象によって沈降した箇所もあります。建物と園庭ともに被害が大きく、行政からは全壊認定の判定を受けましたが、ほかに保育をできる場所がないため、3月22日から1階にある比較的安全な部屋で保育活動が再開されました。その状況の深刻さから、日本ユニセフ協会は三宝保育園の仮設園舎の建設支援を決定しました。そして、いわき市による園庭の土壌の入れ替え作業が終了した9月に仮設園舎の建設に着工し、11月14日から供用が開始されました。

「震災直後の3月末時点では、園の再開を求める園児はわずか2名でしたが、5月の連休明けには83名が戻ってきて、今は97名になっています。若くてお仕事をしながらお子さんを育てている、ギリギリでやってらっしゃるお母さんが多いです。そんなお母さんたちの要望に応え、保育を再開するために公民館や公共施設をあたってみたのですが、どこも借りるこ

とができませんでした。それで急遽、建築士の方に園舎の状態を見てもらったところ、1階ならなんとか大丈夫でしょうということでした。それで、トイレと調理室だけを修繕して、余震が続くなか、いつでも避難できるようにバスを園庭に待機させて再開



園長の阿部美知子先生



被災した本園舎



しました。

廃園か建て替えしかないということは早い段階でわかっていたのですが、どれだけの園児が戻ってくるのか、また、原発事故の影響や周りの状況もわからなかったので決めかねていたところ、理事長がそれだけの園児が必要とくださっているのであれば建て替えの意味があると判断し、まず仮設を建てましょうという決定をしました。それで、行政に補助金の相談をしたのですが、今年度は難しいと言われ、その後の見通しも立たない状況でした。インターネットの情報でユニセフが建設支援をしていることを知り、副主任がユニセフに相談をしたところ、支援をしてくださるというお話をいただいたんです。26名いた職員も17名が残ってくれまして、自分たちの家も全壊・半壊したにもかかわらず、主任、副主任が中心となり、子どもの命は私たちが守るしかないという使命感と責任感だけで行動してくれています。

ユニセフが仮設園舎を建ててくださったおかげで、これを足がかりにやっていけるという希望が見えてきて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。仮園舎のリース期間も延長できるとおうかがいしているのですが、いつまでもユニセフのご厚意に甘えてばかりいられないので、希望としては2012年3月末までに市に損壊した園舎を解体してもらい、それから2年以内には恒久園舎を建てる方向で動いています」と、園長の阿部美知子先生は1年を振り返るとともに、今後の見通しについて話してくれました。



完成した仮設園舎、「みなさん、ありがとう!」



新しい園舎から、はじめてのお出かけ

## 「ユニセフ ちっちな図書館」プロジェクト

このプロジェクトは、震災発生から2週間後の3月25日からスタートしました。JBBY（日本国際児童図書評議会）と協力しながら、全国から寄贈された本を、被災地の避難所、保育園や幼稚園、学校、コミュニティに届けました。12月のプロジェクト終了時点で、配布された数は約33万冊（6,500セット以上）となりました。

宮城県塩竈市立塩竈第二小学校内の二小仲良しクラブでは、家族が仕事などのため不在となる1年生から3年生48名が、放課後18時まで過ごしています。指導員の先生は、

「学校では元気に頑張っている子どもたちですが、自宅に戻ると仮設住宅や修繕されてない家で過ごすなど、それぞれが震災の爪あとが残る現実と向き合っています。毎日、贈っていただいた絵本をうれしそうに開いて読む姿が見られ、親の帰りを待つ子どもたちのほっとする時間となっているようです」と話しています。



ユニセフハウスの駐車場に積み上げられた全国から寄贈された本

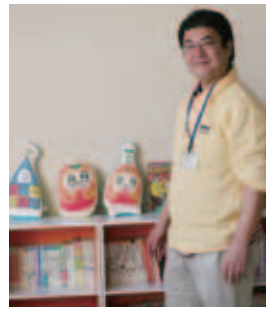
## 女川ちゃっこい絵本館

宮城県牡鹿郡女川町では、2011年6月のオープンを目指して『絵本図書館』の準備が進められていましたが、津波によって4万冊の絵本が流されてしまいました。そこに寄せられたのが『ユニセフ ちっちな図書館』プロジェクトや、ほかの市民団体、企業などから寄贈された約5,000冊の絵本でした。日本ユニセフ協会は、クリエイターの方々から室内のレイアウトや本のディスプレイなどのご協力をいただき、5月10日に女川町立女川第二小学校の3階に『女川ちゃっこい絵本館』を開館しました。

「図書室は勉強中心の利用を目的につくられていますが、『女川ちゃっこい絵本館』はカラフルで明るく、未就学児童や小学校低学年の子どもたちが絵本にふれて、遊べる優しい空間なんです」当施設の運営を担当している女川町教育委員会生涯学習課の笥あゆみさんは、そう語ってくれました。7月25



女川ちゃっこい絵本館



双葉町健康福祉課の中里俊勝さん

日より『女川ちゃっこい絵本館』は、1階にある玄関横の広いスペースに移設され、第二小学校の子どもたちだけでなく、市民のみなさんにも親しまれ、広く利用されています。

また、福島県双葉町のみなさんが避難生活を送っている埼玉県加須市の旧騎西高校の体育館の一角には『ふたばひろば』が設けられ、子どもたちの遊び場としてだけでなく、保護者の憩いの場にもなっています。双葉町健康福祉課の中里俊勝さんは次のように話しています。

「加須市には双葉町以外から避難してきている被災者もいます。そんなみなさんにもお子さん連れで気軽に遊びに来ていただき、交流の場として活用してもらえれば幸いです。」

## 安全な学校外活動の場所の確保

震災後、子どもたちが楽しくかつ安全に過ごすことができる場所の確保が求められています。特に仮設住宅に住む子どもたちは、学校に通う以外は仮設住宅のなかで過ごすことが多く、精神的に不安定な状態になってしまうことが懸念されます。そのようなことから、日本ユニセフ協会は、宮城県において、子どもたちが安心して遊ぶことができる屋内施設の建設と再建を支援しました。

震災の影響により、女川町立女川第一小学校と女川第四小学校も女川第二小学校内で授業を行うこととなり、校舎内に子どもたちが放課後に過ごせる場所の確保ができない状況がありました。そこで2011年10月末に、女川町教育委員会と女川町小学校校長会の要請を受け、女川第二小学校の敷地内に子どもたちのための屋内施設『女川町オレンジハウス』の建設に着手し、12月22日に完成を迎えました。この『女川町オレンジハウス』は、学校に通う子どもたちだけでなく、休日には子どもやお母さんたちの交流の場所としても活用されています。



12月22日に行われた「女川町オレンジハウス」完成式典の様子

同様に、被災した気仙沼市立南気仙沼小学校の学童保育施設についても、市の要請を受けて再建支援を決定し、2012年4月末完成予定で進められています。被災した南気仙沼小学校は、現在、気仙沼小学校にて授業を再開しています。また、南気仙沼小学校に隣接していた学童保育施設も津波で流失したため、気仙沼小学校の教室を利用して臨時学

童保育を実施してきました。しかし、継続的に教室を利用することが難しいという判断から、気仙沼小学校の敷地内に建設されることになりました。この学童保育施設は、南気仙沼小学校だけでなく、気仙沼小学校の学童保育施設としても使用され、完成後には常時40名の子どもたちが利用する予定になっています。

また、2012年1月6日には、宮城県名取市に『どんぐり子ども図書室』がオープンしました。名取市図書館は、建物の損壊が大きかったものの、幸い蔵書は無事に残っていたため、震災後は被災した図書館の車庫と巡回図書館用の車両を使用して、図書の利用を一部再開していました。県内にある他地域の図書館の再開のめどが立つなかで、名取市立図書館のみ見通しが立たなかったため、10月中旬に名取市の要請を受け、支援を決定しました。



完成したばかりの「どんぐり子ども図書室」にやってきた親子（左）  
震災後、車庫と巡回図書館用の車両を使用して、利用再開した頃の名取市立図書館（右）

## 保育士派遣事業の実施

震災後、早急な保育の再開は、就学前の子どもを持つ家庭の生活再建には必要なことでした。被災地の保育園では、早く保育が再開されるよう努力をする半面、保育士の多くは自らも被災者であり、震災後十分な休暇を取ることができないまま、保育園での勤務を続けてきました。日本ユニセフ協会は、その身体的・心理的負担を懸念し、東京都社会福祉協議会保育部保育士会（東社協保育士会）と、青年海外協



織笠保育園園長兼子育て支援センター長の川端京子さん（左上）  
クリスマス会で子どもたちに話をする鶴田さゆりさん（右上）

力協会（JOCA）の協力を得て、岩手県大槌町と山田町の保育園に、短期または長期で保育士を派遣する事業を行っています。

東社協保育士会からは、2011年7月から12月末までに5つの保育園に延べ76名の保育士ボランティアが派遣され、286日間分の勤務を行いました。

また、JOCAからはこれまでに短期で8名、長期4名の保育士が派遣され、被災地での継続的な子育て・保育支援につながりました。派遣先の1つである山田町地域子育て支援センターは、山田町立織笠保育園のなかに設置されていました。織笠保育園は高台にあり、幸い被害を免れたため避難所に指定され、約30名の被災された方が8月7日まで生活をしていました。園は4月1日より一時保育を、6月1日から通常保育を再開しましたが、子育てセンターは、震災の影響で職員を配置することができず、活動が休止されていました。震災後、園長の川端京子先生は、園長としての通常業務に加え、園内の避難者への対応、また子育てセンターの元職員とともに、各避難所をまわり、未就学児を抱えるお母さんと子どもたちを訪ね、補食（おやつ）を配布したり、お母さんからの相談を受けるなどの活動を行ってきました。

川端先生は、次のように語っています。「被災されたお母さんの話を聞き、子育てセンターの再開を待ち望んでいることがよくわかりました。だからこそ、少しでも早く再開し、思い切り遊ぶ時間をつくってあげたいと思いました。ユニセフを通じて、JOCAさんから保育士さんを派遣してもらえることが決まった時、大変うれしかったです。最初は県外から派遣されてきた保育士さんたちが慣れない土地でうまく仕事ができるか心配でしたが、すぐに保護者や職員とも打ち解け、全く問題はありませんでした。子育てセンターの業務も無事、再開することができました」

また、2011年11月から2012年3月末まで派遣されている鶴田さゆりさんは、「10月中旬に、青年海外協力隊のボランティアとして幼児教育の事業で派遣されていた中国の重慶から帰国しました。中国で震災のことを知り、今度は被災地の復興に貢献したいと思っていました。少しでも山田町のために役に立ちたいと頑張っています」と話していました。

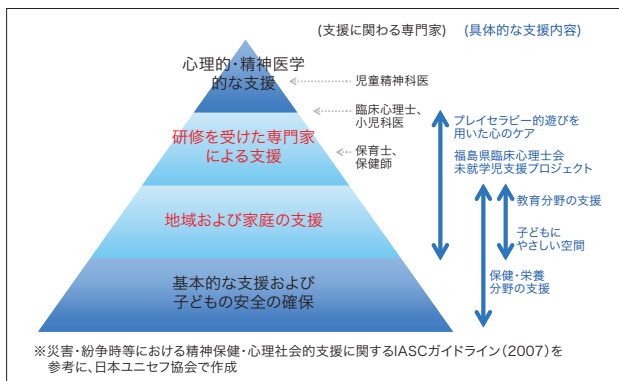
## 東北中学校体育大会および新入大会の参加を支援

日本ユニセフ協会は、被災した岩手・宮城の中高生が、他地域の子どもたちと同じように全国大会を目指し、これまで積み上げてきた練習の成果を発揮できるよう、2011年5月から7月の間に実施された、中高総合体育大会への支援を実施しました。これに引き続き、岩手では、沿岸地域の中学校などに通う、震災で被災した生徒420名を対象に、東北中学校体育大会および新入大会の参加に関わる費用の支援を実施しました。大会への参加は子どもたちの夢でもあり、真剣に競技に取り組むその姿は、多くの人々に感動を与えてくれます。子どもたちの活躍は、被災地での明るいニュースとなっています。

# 心理社会的ケア

## 心理社会的支援とは

今回の震災で日本ユニセフ協会が行っている支援活動は、教育、保健・栄養、保護などの分野とともに、子どもたちとその周囲の人々の精神的・心理的な健康をも含めたものになっています。IASC※などが定めた国際的基準としての心理社会的支援とは、子どもたちが生きていくうえで最も必要とする支援を優先して行ったうえで、心理的な安定のための支援を行うということです。それは、地域に住む子どもたちや保護者が安全かつ安心して過ごすことができる環境の整備など、もともとその地域に住んでいる人や社会とのつながりを基盤にした支援になります。災害などの体験の後に、専門的な心理支援を必要とする子どもたちに対しては、その状況と度合いに応じて、専門の知識を持つ保育士や教師、保健師、または臨床心理士や小児精神科医などによるケアを受ける場が提供されなければなりません。



心理社会的支援のピラミッド図

日本ユニセフ協会は、こうした国際的基準に基づき、日本プレイセラピー協会（岩手・宮城）、福島県臨床心理士会（福島）と協力し、未就学児とその保護者をはじめとした、子どもたちと接するおとなへの支援を行っています。



震災後の子どもの心のケアが大事と語る湯野貴子さん

臨床心理士で日本ユニセフ協会東日本緊急支援本部の心理社会的ケアアドバイザーである湯野貴子さんは、「災害後における子どもの心のケアは、親や保育園・幼稚園の先生方など子どもが一番安心をもらえる身近なおとなたちが行うことで、最も良い結果をもたらします。そうした身近なおとなたちが、緊急時における子どもの心の状態を理解し、どのように関われば子どもの安心につながるのかといった専門的な知識を得ることのできる研修の実施が重要になってきます。また、子どもたちが安心して過ごすことができる環境

の整備も重要ですが、その子どもを支える周りのおとなたちにも支援が行われなければなりません。子どもたちと同様、多くの保護者や先生も震災によって大変な経験をしています。研修は、専門知識を得ることで子どもたちへの対処に自信を持つことができるだけでなく、参加したおとな同士で支え合う場の1つにもなります。おとなが安心感を得ることは、子どもを支える力につながります。

震災後、地震や津波が起こった時の体験を遊びのなかで再現しようとする『つなみごっこ』ともいえるような様子が子どもたちに見られるようになりました。保育園・幼稚園の先生方は、いつもとは少し違う遊びをする多くの子どもたちの姿を目にしてきたようです。そんな時、おとなはどのように子どもたちの気持ちに寄り添えば良いのか、具体的にどんな声をかけてあげれば良いのかを、専門的な観点からアドバイスしていく場を、継続的に提供していくことが必要なのだと思います」と語っています。

※IASC (Inter-Agency Standing Committee) : 国連をはじめ様々な人道支援組織により構成される、人道支援の連携調整のための委員会

## 日本プレイセラピー協会との連携

発達途上にある子どもたちは、おとなと違って、思ったことをすぐに言葉にすることができません。そこで、子どもたちは、感じたことや体験したことを遊びのなかで表現しようとしています。講習会では、大変な体験をした子どもたちに見られる行動の特徴や、子どもたちが安心感を持てるような遊びの方法を、臨床心理士による専門的な観点から保護者や先生に指導しています。また、震災で家族を亡くした子どもの気持ちにどのように寄り添えば良いのか、また体験した恐怖感を緩和させるための歌や遊びなどを紹介しています。2011年3月末から、岩手や宮城で研修や講習会が開催され、12月末までに74会場で実施されました。講習会に参加した保育園・幼稚園、団体などは230にのぼり、参加者総数は約1,520名となりました。



仙台で幼稚園教諭を対象にプレイセラピーの講習を行う本田涼子さん（日本プレイセラピー協会理事兼当協会心理的社会的支援アドバイザー）

## お母さんと子どもの心のケア活動

日本ユニセフ協会は、福島県臨床心理士会に委託し、お母さんと未就学児の心のケア活動を実施しています。避難所、仮設住宅、保健センターなどに、臨床心理士と保育士を派遣し、お母さんには臨床心理士とのグループワークを、子どもたちには保育士との遊びを通して、心のケアを行います。6月下旬から始まったこの活動は、12月末までに福島県内74ヵ所で170回開催され、2,782名（おとな1,318名、子ども1,464名）が参加しました。

「活動開始当初に比べると、話すだけで涙してしまうような、大きなストレスを抱えたお母さんは、時間の経過とともに少しずつ減ってきています。しかし、小さな子どもを抱えたお母さんにとって、放射能の問題への不安やストレスは、そう簡単に消えることはなさそうです。この場を通じて、ほかの参加者から情報を聞き、意見交換をして、自分なりに考えた決断をしてほしい。そして、生まれ育った土地で生きることの自信を持ってほしいです」そう語るのは福島県臨床心理士会副会長の成井香苗さんです。この活動は、乳幼児健診の場を活用した相談会、仮設住宅への巡回相談や、保健師への研修も併せて実施されています。長期化する問題に対応するため、2012年度も引き続き行われます。



白河市内で実施されたグループワークの様子



スタッフと今後の対応について話し合う福島県臨床心理士会副会長の成井香苗さん（写真中央）

## 気仙・子どものこころのケアセンターへの心理士派遣支援

岩手県気仙地区（大船渡市、陸前高田市、住田町）では、『気仙・子どものこころのケアセンター』が、児童養護施設である大洋学園内に2011年7月から設置されています。大洋学園の児童家庭支援センターの心理士職員3名が、震災直後から、地区内の避難所や保育園・幼稚園、仮設住宅などを巡回し、子どもたちの状況把握を行い、未就学児童を中心とする子どもたちや親を含めた支援を行っています。職員の

方々自身も被災者であるにもかかわらず、2011年3月から十分な休息も取ることができないまま、通常業務と兼務にて活動を継続していました。今後も活動を続けるためには、人員の確保が不可欠だと判断されたため、日本ユニセフ協会は心理士の派遣の支援を決定しました。2011年10月から2012年3月までの間に、全国児童家庭支援センター協議会と連携し、全国の児童家庭支援センターから9名の心理士の方々が派遣され、センターの来所者の対応や電話相談などの業務を行いました。大洋学園園長の刈谷忠さんは、「大洋学園の全職員のうち、家族を亡くした者が3名、家屋を失った者が8名おります。きびしい状況でありながら、お互いを支え合いながら子どもたちのサポートを続けています。これもご支援があったからこそと感謝しています。今、市内の小中学校グラウンドと児童公園には、仮設住宅が立ち並び、子どもたちの遊び場が制限されているような状況です。大洋学園の周辺にも約600戸が建ち、1,000名以上の人口急増となりました。復興までの道のりは長いものがありますが、職員一丸となって子どもたちのために取り組んでまいります」と伝えています。

## 被災地でのバス遠足実施への支援

日本ユニセフ協会は、震災の影響を受けた岩手県沿岸地域と、福島県内で暮らす子どもたちに、思い切り遊ぶ機会を提供することを目的とした、春と秋のバス遠足の実施を支援しました。

岩手県では、がれきが残る被災地の子どもたちに、内陸の遊戯施設や自然のなかで遊んでもらおうと2011年5～6月に実施された『ユニセフ 子どもバス遠足』に続き、9～10月には『ユニセフ ちゃっこいっこバス遠足』と題して被災地の保育所や幼稚園が企画する秋の遠足を支援しました。『ユニセフ ちゃっこいっこバス遠足』には、7市町の37の保育園・幼稚園に通う子どもたち1,934名と、その保護者および職員1,551名、合計3,485名が参加しました。

また、福島県内では、『おもいっきり!そとあそび』プロジェクトが、2011年5～8月と10～11月に実施されました。11月末までに、福島県内の9市町村の保育園・幼稚園に通う子どもたちとその保護者延べ40,173名が参加しました。

参加者からは、「当園には、親を亡くした児童、津波を経験した子どもたちがいます。参加した保護者や子どもたちの



バス遠足で訪れた遠野ふるさと村で餅つきを楽しむ子どもたち

間に明るい笑顔が見られ、私たち保育士もとてもうれしく思いました」（岩手）、「原発事故のため外で遊べず、体力低下ばかりでなく、心も元気をなくしてしまいそうでしたが、久しぶりにのびのび遊びまわると子どもの様子を見ることができてうれしかった」（福島）といった感想が寄せられました。

# 子どもの保護

## 子どもへの暴力防止に向けた J-CAPTAとの連携

日本ユニセフ協会は、J-CAPTAと連携し、子どもたちの人権を守り、暴力を予防し、本来持っている一人ひとりの生きる力の回復を復興のなかで継続して支えていくプロジェクトを進めています。具体的には、子どもたちが様々な暴力から自分の心と体を守るための教育プログラム『CAP (子どもへの暴力防止) プログラム』の実践を推進しています。2011年10月と11月には、被災地で子どもたちと関わるおとなを対象としたCAPスペシャリスト養成講座が盛岡と仙台で実施され、約70名が40時間にわたって行われたプログラムを受講しました。岩手県、宮城県、福島県の計7つの地元CAPグループに新たにスペシャリストになった方々が加わり、被災・避難地域の保育園・幼稚園、小学校や児童養護施設などの子どもたち、保護者、教職員の方々、また、地域の児童民生委員など子どもたちを見守る方々を対象にしたCAPワークショップを開催しています。2012年1月末までに、小学校や保育園・幼稚園などの保護者や教職員、地域の方々向けのワークショップは20回開催され、計313名が参加されました。子ども向けのワークショップは、宮城県内の小学校で13回、福島県内の幼稚園で2回、計15回、あわせて407名の子どもたちが参加しました。

「子どもたちの不安な気持ちは、ため込んでいても消えることはありません。子どもたちからは、そのことをわかってほしいと伝えるサインが出ています。そこでおとなが、子どもたちの話に耳を傾け、肯定し、受け入れてあげられる環境をつくるのが大切なのです」と語るのは、講師の石附幸子さん。また、岩手県山田町でのワークショップを企画した、地域福祉相談員の上野美智子さんと阿部信子さんは、「今回のワークショップを通じて、子どもたちにとって暴力のない、いつでもおとなに相談できるような山田町にしたい。そして子どもたちがいつか、山田町で生まれて良かったと言ってくれるような街づくりを目指したい」と話してくれました。



11月21日に岩手・山田町で行われた、CAPおとな向けワークショップ

## ラジオコマーシャルやチラシ等による メッセージを通じた活動

被災地の子どもたちに起こりうる問題として懸念されている、虐待などを含む子どもへの暴力防止を呼びかけるラジオコマーシャルを日本ユニセフ協会が制作し、そのメッセージを広く伝えるキャンペーンを実施しています。子どもたちへ、保護者へ、そして子どもたちと関わるすべてのおとなたちへ語りかけるメッセージがつけられました。そのメッセージを聞いた方が、相談・通報できる専門機関窓口も、併せて紹介しています。メッセージの収録には、教育評論家の尾木直樹さんにもご協力をいただきました。被災した岩手県および宮城県で、コミュニティFM放送局や災害FM放送局などへ、放送のご協力を働きかけています。



岩手県で配布されたチラシ

また、岩手県内では、岩手県児童家庭課からの依頼により、DV (ドメスティック・バイオレンス) と虐待予防のメッセージと相談窓口を明記したチラシを15,800部制作し、沿岸地域の自治体を通じて配布しました。また、岩手県山田町では、虐待防止のメッセージと相談窓口を記載したクリアファイルを作成し、全戸配布によって町内での虐待防止に関する意識啓発を目指しています。

## 父子家庭・父親育児支援

日本ユニセフ協会は、2011年9月末より新座子育てネットワークと連携し、父子家庭や、ストレスを抱えている被災県の父親たちへの支援を行っています。

その一環として、保育所、幼稚園、子育て支援センター、児童相談所や一時預かり所など子育て関連の施設職員をはじめ、仮設住宅の自治会長などに向けた研修会を実施しています。参加者のみなさんには、父子家庭・父親育児に関する



12月9日に石巻市内で実施されたお父さん支援員のための研修会



支援技術・知識・情報・思考力などを身につけていただき、『お父さん支援員』として被災した父親とその家族をサポートすることによって、養育放棄や子どもを巻き込むDV（ドメスティックバイオレンス）、児童虐待などの予防を目指しています。研修会は12月末までに仙台市（2カ所）と石巻市（6カ所）で8回実施され、107名の参加者がありました。また、研修を受けられた『お父さん支援員』の企画により芋煮会や餅つきなどのイベントが1月末までに10回開催され、201名（おとな120名、子ども81名）のみなさんが楽しいひとときを過ごすとともに、新たなつながりをつくるきっかけとなりました。

石巻市の仮設住宅で暮らす中野信行さんは研修会を受け、『お父さん支援員』としてイベントを企画し、実施している1人です。12月25日には仮設開成第1団地の集会所で『パパケーキでクリスマス』というクリスマス・パーティーを、そして1月8日には『お父さんといっしょ!! アンパンマン・ツアー』と題して仙台アンパンマン子どもミュージアムを見学するバスツアーを企画して、お父さんと子どもを元気づけています。

「自分もそうなのですが、世帯主なのに大黒柱になれていないんです。仕事もなく、家のローンだけが残ってしまいました。被災したお父さんたちは、みんなそんな状況ですから、その心痛や悔しさは並大抵ではないと思います。それで、引きこもり、結局みんなほとんど出てこない。

ただ支援してもらうだけでなく、自分も行動して、できる範囲のことは手伝いたいですし、1人でも多くのお父さんに参加してもらい、横のつながりができれば自分たちのためにもなる。そういう気持ちで活動しています。これは仮の住まいだしそんなに頑張らなくてもいいんじゃないのと思っている人もいられるかもしれませんが、孤立して悩んでいるよりも、支え合っていれば乗り越えられるし、そのつながりは、仮設を出た後もいつまでも残ると思います」中野さんは、そう語ってくれました。

『お父さん支援員』の方々は、地域のお父さんたちとのネットワークづくりを目的に、今後も楽しいイベントを企画されています。



お父さんと一緒につくったケーキを食べる子どもたち



クリスマス・パーティーを実施した中野信行さん

## Tegami Project

被災地の子どもたちに向けて、世界の子どもたちから日本ユニセフ協会に届いた応援の手紙。その数は、2,000通（約30カ国）以上にのぼります。2011年7月15日からスタートしたTegami Projectは、こうしたたくさんの想いが詰まった手紙を、被災地の子どもたちに届けるとともに、手紙を受け取った子どもたちからの返事を各国に届ける活動です。届ける際には、各国にゆかりのある方たちによる国際理解の授業も行います。12月末現在、18カ所の学校や保育園・幼稚園などに手紙が届けられました。

日本ユニセフ協会は引き続き、被災地の子どもたちが海外の子どもたちとのかかわりを通じて、今後の夢や可能性を大きく持てることを願い、このプロジェクトを進めていきます。



アフガニスタンからの手紙を受けとった湯本高校のみなさん。「日本のために、一生懸命書いてくれてありがとうございます。みなさん大好きです」



湯本高校からの手紙を手にとるカブール空港に到着したユニセフ・アフガニスタン事務所の竹友有二さん



湯本高校からの手紙を手にとるアフガニスタンの女の子。「可愛い返事を送ってくれてありがとう。とてもうれしいです」

## ユニセフ 祈りのツリー project

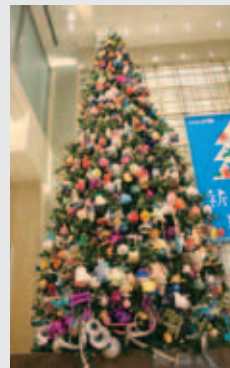
震災後、初めて迎えるクリスマスに心からの笑顔を輝かせてほしい。そんな想いから始まった「ユニセフ 祈りのツリー project」。企業や大学の垣根を越えて集結したプロのクリエイターや美大生2,000名がツリーに飾るオーナメントを制作。手づくりのオーナメントは、岩手、宮城、福島の保育園や幼稚園、そして関東に避難している子どもたちのクリスマス会など36カ所にツリーやソフトイととに届けられました。東北各地で行ったオーナメントづくりには975名の子どもたちが参加し、笑顔が溢れる時間が生まれました。また、都内と仙台市内あわせて7カ所の百貨店や復興屋台村 気仙沼横丁でも東北の子どもたちの幸せを祈る特別なツリーとして、オーナメントで飾りつけた“祈りのビッグツリー”が誕生しました。



岩手県の保育園でのオーナメントづくり



全国から届いたものとあわせて飾り付けをする子どもたち



都内の百貨店に展示された“祈りのビッグツリー”

# 子どもにやさしい復興計画

## 震災復興に向けたまちづくり、 子どもたちの声！

被災地では、町の復旧・復興作業が進められるなか、どの地域も、国と県が策定する枠組みに沿って復興計画を策定しています。日本ユニセフ協会は、「子どもにやさしい復興」の実現に向けて、復興計画のなかに子どもたちの声が積極的に取り入れられるよう、また、復興に向けたまちづくりに子どもたちも参画できるよう、アドボカシーおよび技術的支援を実施しています。大学、学会、企業などの専門家の方々とともに活動を展開しています。12月末現在、岩手県大槌町、宮城県女川町、福島県相馬市が積極的にこの取り組みに参加しています。

## 大槌町子どもの公園づくり

日本ユニセフ協会は、被災地の復旧・復興のプロセスに子どもたちも参加できる機会をつくり、楽しく安心して生活できる町になるよう、岩手県大槌町、宮城県女川町、福島県相馬市の取り組みを支援しています。その1つに『大槌町子どもの公園づくり』があります。

日本ユニセフ協会は、津波で遊び場を失った子どもたちや住民が集うことができ、安心して遊べる場所がほしいという大槌町からの要請に応え、町内2カ所に児童公園の整備への支援を決定しました。新設場所はそれぞれ小槌地区と大槌地区の仮設住宅団地のサポートセンター敷地内で、4月末のオープンを目指し、人形劇『ひょっこりひょうたん島』のモデルとなった大槌湾にある蓬莱島にちなんで、海賊船とお城を模した遊具の設置が進められています。

2011年10月23日、住民の意見を反映した公園づくりを目的として、大槌町地域整備課の主催によるワークショップが開かれました。町内の中央公民館に約20名の未就学児童が集まり、遊具の色を決めるために5色のクレヨンで思い思いにぬり絵を描いてもらいました。また、保護者の方々にはすべり台や階段などの形を選んでいただきました。どの色がふさわしいか、完成したぬり絵に参加者全員が投票を行った結果、越田伊吹くん（4歳）と伊織さん（2歳）兄妹と一緒に描いたぬり絵と、関谷湧真くん（2歳）のぬり絵が選ばれました。

「津波にあう前には子どもたちの遊び場はけっこうあったのですが、今は流されて何もありません。設置して2カ月も経たないうちに遊具が流された公園もあります。復興の見通しが立たないなか、ユニセフから公園づくりの話があり、よかったと思いました」。そう語るのは、遊具のぬり絵が採用された湧真くんのお父さんで福祉課職員の関谷辰也さんです。

「子どもたちだけでなく、町民のみなさんが集まる場所になればうれしく思います。公園を含め、役場としても暮らしやすい町づくりを目指しています」と、地域整備課の久保晴紀さんは、話してくれました。

「遊具はメンテナンス次第で長年使うことができるので、将来的には新しいまちづくりの中でつくられる児童公園の敷地へ移設されます。そういった意味では、場所が変わっても遊具自体は参加したみなさんの想いとともに残っていくことになります。子どもたちには、未来へ残るものづくりに関与してもらったともいえ、有意義だったと思います」と、地域整備課の廣瀬栄司さんは語ってくれました。



子どもたちのぬり絵をもとにつくられた遊具完成予想図

## 相馬市での子どもにやさしい復興計画への 取り組み

2011年11月6日、震災で大きな被害を受けた福島県相馬市で、『相馬の子どもが考える東日本大震災』発表会が相馬市議会場にて開催されました。本発表会は、子どもたちがこの震災に向き合い、お互いに意見を交換して課題を明らかにするとともに、相馬市の未来について考えを深めていくことを目的にしています。

日本ユニセフ協会は、子どもたちが自分たちのふるさとである相馬市について考え、発表する機会を設けることで、子どもたちが考える子どもにやさしい復興の実現を支えるべく、相馬市教育委員会主催で開催された今回の発表会の実施を支援しました。

参加したのは、相馬市内の小学校10校、中学校5校で、各校の代表が3名ずつチームになり、各校でまとめられた内容を発表しました。それぞれテーマを設定し、学校によっては校内アンケートの実施や、クラスでの話し合いなどを行ってきました。それぞれの発表内容には、震災直後の子どもたちの様子や、家族の状況、そして震災後に気付いたこと、子どもたちの願い、相馬市の未来や復興への強い思いなどが込められていました。

## 東日本大震災を振り返り、今、願うこと

「こわいよ、死にたくないよ」

「ひかりちゃん、死にたくないよ」

と、目の前のゆきなちゃんが死の恐怖を口に出しました。

大きな地震が起きてから、私たちは机の下にもぐり、揺れ動く机の脚を両手で必死につかんでいました。

ものすごい地鳴りと共に、強度を増しながら長く続く地震に、天井からつり下げられた蛍光灯は、ブランコのように左右上下に激しく揺れ動き、今にも吹っ飛びそうな勢いでした。口にはしなくても、みんな学校がつぶれ死んでしまうのでは、という恐怖のまっただ中にいました。

先生は必死の形相で、外に逃げ出すタイミングを考え、迷っているようでした。

そんな時、かずき君が、

「先生、もうダメだよ。普通じゃないよ。逃げなきゃダメだよ」

「先生、まずいよ。外に出ようよ」

と叫びました。この叫び声に、

「よし、みんな外へ逃げよう」

と先生がやっと指示を出しました。

校庭に避難したとき、私たち以外の学年は、まだ教室の中にいました。

そこで先生は、

「急いで校庭に避難しろー。教室は危ないぞ」と知らせに走りました。

校庭に全員が避難してからも、大きな地震がくり返しました。そのうち、泣き出す人もたくさん出てきました。みぞれが降り、寒さきつく、震える人もたくさんいました。先生に抱いてもらう人、かけつけたお母さん方に抱きしめてもらう人、学年ごとに身を寄り合わせ、恐怖感と寒さをこらえていました。

ようやく、地震がおさまりかけ、おじいちゃんやおばあちゃん、お父さん、お母さん達が私たちの身を案じてかけつけてくれました。

その後、大急ぎで自宅へ向かいました。

このとき、想像をはるかに超えた大津波が来たことを、まだ誰も知りませんでした。校庭から200mくらい先のところまで、津波が来て自動車や釣り船、壊れた家の柱、松の木など、たくさんのがれきが押し流されて来ていたのです。

私たちの学校で、津波で家が流されてしまった人は、1人だけでした。

でも、12日以降は原子力発電所の事故のため、新たに放射能との戦いが始まりました。目に見えない、臭いもしない、恐

ろしい放射能のために相馬市から避難する人もたくさん出てきました。私たちの学校では、市外や県外に避難した人は40%にもなりました。残りの人は、逃げたくても逃げられず、仕方なく相馬市にいるしかなかった人たちでした。

日立木地区は、停電や水道の断水が長く続き、食べ物にも困っていた人がたくさんいました。電話も使えず、ガソリンもなく品物も買えませんでした。

クラスの友達の中には、ろうそくの炎だけで1週間過ごした人もいました。なにより、一番困ったのは、水が出なかったことです。遠く離れた親戚の家に何度も水をもらいに行きました。お父さんやおかあさんの苦労は大変なものでした。

学校がやっと再開できたのは、4月18日。

学校で友達や先生方と再会できたときのうれしさは今でも忘れません。教室の中では、お互いの肩をたたいて笑顔で喜び合いました。大きな声で友達と感情をぶつけ合ったのは、1ヶ月ぶりでした。でも、放射能への不安は日ごとに増すばかりでした。

6月はじめと10月に、校長先生の放射能の授業がありました。2度目の10月は、私たちの悩み、不安をもとに、2時間授業をしていただきました。この特別授業で、放射能や放射線について少しですが理解できました。放射線に被曝しない生活の仕方や食べ物の安全性、風評被害、自分たちのこれからの生き方について学びました。この学習で、とても安心感を持つことができました。

これから20年、30年、私たちは放射線に負けない生き方をしていかななくてはなりません。そうしながら、相馬市の復旧・復興をうけおうのが、私たちの役目だとも思っています。

今回の東日本大震災では、たくさんの人々が亡くなりました。また、家や松川浦などの、自然など貴重な財産をも失いました。自然の力のすごさをまざまざと知らされました。言いようのない悲しみと、不安の日々でしたが、行方不明者の方の捜索やがれきの片付けなどの仕事に当たられた自衛隊や消防の皆さん、おまわりさん、全国からのボランティアの方々、外国からも寄せられた支援物資や義援金など、人間の温かさやすばらしさを学ぶこともできました。

私は、以前、相馬の松川浦について調べ学習をしたことがあります。相馬の松川浦は、海水と淡水がまざりあう、全国でも数少ない場所です。

松川浦は、絶滅危惧種のヒメマイトトンボが飛び、白い小さな花をつけるヒメハッカが咲き、サンショウクイという珍しい鳥が朝鮮半島からこの地をめがけて飛来する場所でした。豊かな自然が広がっていた松川浦は、生き物たちの宝庫であり、生き物たちにとって貴重な場所でもあったのです。

今回の大震災は、これらの植物や生き物たちの生態系にも大きなダメージを与えたことでしょう。私は、「松川浦の豊かさを、もう一度以前の姿と同じようにもどって欲しい」「生き物たちの命をつないで欲しい」と心から思っています。

相馬市では、市の復興基本計画が作られたそうですが、私たち市民一人ひとりが相馬の未来への夢を持ち、できることから一歩いっしょ取り組んでいくことが大切だと思います。

私たちには、具体的な夢はまだ見えませんが、松川浦や宇多川など子どもたちが安心して、遊べる豊かな自然を取り戻して欲しいこと、自然災害を大きく受けない、生活環境作り、新たな会社や工場、研究所などができ、私たちがそこで働けるようになることを願っています。

「相馬に生まれ育ってよかった」「相馬で生きていける」といった喜びや希望が持てる相馬市になって欲しいと願っています。

相馬市の復興は、これから20～30年はかかることと思います。それは、私たちの人生そのものでもあります。

私たちは、相馬市の未来づくりに役立つ人間になれるよう、しっかりと学び、考えていきたいと思っています。

相馬市立日立木小学校6年  
山尾和輝、門馬光里、山本脩人



# あの日を忘れない

どれだけの月日が過ぎても、忘れてはいけない風景がある。

新たな未来の出発点として、「あの日」を見つめた人々の想いを、記憶に刻んでいく。

## 『子どもたちの3・11ユニセフ 東日本大震災報告写真展』の開催

東京国際フォーラムでの展示を皮切りに、震災取材した日本の新聞・通信社25社と、21名の写真家による、被災地の子どもたちを取り巻く状況と当協会の支援活動の様子を伝える写真展を開催。2012年3月には、ニューヨークの国連ビル内のギャラリースペースでも展示されます。この写真展を通じ、息の長い支援を世界に呼びかけています。

※企画・構成については新藤健一氏、実施協力として日本新聞博物館、東京写真記者協会、東北写真記者協会、協賛企業として株式会社ニコン、キヤノン株式会社、富士フイルム株式会社、株式会社タムロンにご協力をいただきました。



鯉のぼりの下、日本ユニセフ協会のアグネス・チャン大使と電車ごっこする園児。(2011年4月30日、陸前高田市) 撮影：新藤健一



原発事故で避難、体育館で寝る福島県浪江町の子どもたち(2011年3月17日、山形市総合スポーツセンター) 撮影：佐々木康

## 『EYE SEE TOHOKU』 プロジェクト

被災地の子どもたちが見て、感じて、考えていることを、写真やメッセージを通じて発信する子ども写真プロジェクト『EYE SEE TOHOKU』。2011年11月から12月にかけて、岩手県大槌町、宮城県石巻市、福島県相馬市で実施され、27名の小・中学生が参加しました。2012年3月から、ニューヨークのユニセフハウスや東北3県をはじめとする各地域で写真展を開催します。

※本プロジェクトの実施費用(写真展含む)と機材の貸出協力について、ソニー株式会社よりご支援いただきました。



ワークショップに参加した子どもたち 宮城県石巻市鮎川浜

© UNICEF/Japan 2017/Giacomo Prozzi

## 『ハッピーバースデー 3.11』 プロジェクト

命の大切さと未来への希望を伝えたい。そして子どもたちの瞳にうつるこれからの日本を、日本中のみんなが考えるきっかけをつくりたい。そんな想いを形にした『ハッピーバースデー 3.11』プロジェクト。日本ユニセフ協会は多くの方々との協力を得て、3月11日生まれの子どもたちが登場する公共CMを制作。写真展の開催などを通じて、本プロジェクトを後援しています。



①3月11日 7:48生まれ  
永尾隆東くんとお母さんの伯子さん(宮城県石巻市)  
入院していた病院は1階まで浸水。避難した屋上で、  
隆東くんを毛布にくるみ、ずっと体温計を見守っていた。

撮影：小林紀晴



②3月11日 11:04生まれ  
松橋玲奈ちゃん(宮城県仙台市)  
母・明香さんの食事は病院から出たが、家族の分は支給されないため、炊き出しや水を探して回った。



お彼岸に寺を訪れ、津波で流失した祖先の墓を見つけ花を添える子ども（2011年3月21日、名取市閼上の観音寺） 撮影：新藤健一



放射線被ばく検査から3ヶ月以上が過ぎて、原発周辺の子ども1,000人のうち45%が甲状腺に被ばくしていたことが明らかになった（2011年3月30日、福島県相馬郡飯館村） 撮影：野田雅也



津波と火災で被災した岩手県の大槌小学校（2011年3月31日、岩手県大槌町） 撮影：新藤健一



© UNICEF/Japan 2011/Akira Sato



© UNICEF/Japan 2011/Toshiro Sano



© UNICEF/Japan 2011/Un Fujiwara



© UNICEF/Japan 2011/Misuzu Kanashi



© UNICEF/Japan 2011/Muna Sasaki



© UNICEF/Japan 2011/Hendri Abe

(上)「とても小さい植物がたくさんはえて、大家族のようだった。すごく寒い朝だったのに、とても元気にみえた」  
佐藤 陽/福島県相馬市

(下)「とってもいい笑顔」 金石望鈴/岩手県大槌町

(上)練習後に校歌を歌う野球部員。佐野智則/岩手県大槌町

(下)「にじはきれいなのにたまにしかでないので、ぐうぜん空の写真をとろうとしたときににじがでてうれしかったです。佐々木優菜/宮城県石巻市鮎川浜

(上)「花って咲いているのを見るだけで心が和むので、それにこの笑顔で和みが2倍になるな—と思います」  
藤原樹里/福島県相馬市

(下)「ボランティアががんばっているところを写真にとりました」 阿部遥樹/宮城県石巻市鮎川浜



③3月11日 15:23生まれ  
瀬川 虎くんご両親(宮城県仙台市)  
陣痛室から避難し、受付奥の簡易ベッドで出産。外に出ると、避難してきた人たちが拍手が。



④3月11日 15:26生まれ  
橋本 菜ちゃん(福島県福島市)  
陣痛室から病院の駐車場に避難し、車の中で出産。母・幸枝さんの願いは、菜ちゃんが当たり前で過ごすこと。



⑤3月11日 16:23生まれ  
泉 凜ちゃん(青森県青森市)  
停電した病院で、懐中電灯一つで夜を過ごした。凛々しく、たくましく生きて欲しいと、凜と名付けた。

# 東日本大震災緊急支援活動 1年間収支報告

【収入】 2011年3月14日～2012年1月31日 (単位:円)

	金額
日本ユニセフ協会 国内事業費より	100,000,000
日本国内で寄せられた募金※1	2,683,593,541
海外のユニセフ協会を通じて寄せられた募金※2	1,153,015,893
<b>合計</b>	<b>3,936,609,434</b>

※1 海外の個人・企業・団体等から直接送金された募金を含みます。  
 ※2 ユニセフ協会(ユニセフ国内委員会)は、世界36の先進国・地域に設置されており、各国内で民間からのユニセフ募金の窓口となっています。2011年3月以降、東日本大震災に対し、15のユニセフ協会(オーストラリア、オーストリア、カナダ、チェコ、フランス、ドイツ、ギリシャ、香港、ハンガリー、アイスランド、イスラエル、韓国、スイス、英国、米国)を通じて募金が寄せられました。

【支出】 2011年3月14日～2012年1月31日 (単位:円)

項目/内容	支出済額 (~2012年1月)	支出確定額※9 (~2012年12月)	支出予定額※10 (~2012年12月)	支出予定額※10 (2013年1月~)	合計
<b>A.緊急支援活動費</b>					
<b>1.緊急支援物資の提供</b>					
物資調達支援	180,300,028	0	0	0	180,300,028
活動報告P.8~ 技術支援※3	7,009,489	0	0	0	7,009,489
<b>小計</b>	<b>187,309,517</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>187,309,517</b>
<b>2.保健・栄養支援</b>					
健診再開・物資調達支援	53,209,218	0	0	0	53,209,218
活動報告P.8 栄養支援プロジェクト	26,668,730	0	0	0	26,668,730
母子保健(母乳促進、妊婦支援、ワクチン、施設整備等)	178,145,515	180,000,000	110,000,000	0	468,145,515
教育施設における給食、補食支援	18,970,355	110,000,000	0	0	128,970,355
技術支援※3	90,178,135	1,300,000	0	0	91,478,135
<b>小計</b>	<b>367,171,953</b>	<b>291,300,000</b>	<b>110,000,000</b>	<b>0</b>	<b>768,471,953</b>
<b>3.教育支援</b>					
バック・トゥ・スクール	435,376,608	104,000,000	0	0	539,376,608
活動報告P.12~ バック・トゥ・幼稚園/保育園	87,490,841	3,000,000	0	0	90,490,841
保育園・幼稚園 園舎再建・修理	607,709,026	1,137,000,000	0	0	1,744,709,026
中高総体	67,528,498	0	0	0	67,528,498
技術支援※3	32,099,730	2,500,000	0	0	34,599,730
<b>小計</b>	<b>1,230,204,703</b>	<b>1,246,500,000</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>2,476,704,703</b>
<b>4.子どもの心理社会的支援</b>					
バス遠足、おもいっきり!そとあそびプロジェクト	91,765,060	40,000,000	0	0	131,765,060
活動報告P.20 ちっちゃな図書館、Tegami・祈りのツリープロジェクト	37,332,837	1,150,000	0	0	38,482,837
物資調達支援	2,169,655	0	0	0	2,169,655
資料等作成※4	1,447,399	0	0	0	1,447,399
技術支援※3	61,272,405	34,000,000	4,000,000	5,000,000	104,272,405
<b>小計</b>	<b>193,987,356</b>	<b>75,150,000</b>	<b>4,000,000</b>	<b>5,000,000</b>	<b>278,137,356</b>
<b>5.子どもの保護</b>					
アドボカシー活動※5	1,454,230	200,000	800,000	1,000,000	3,454,230
活動報告P.22 資料等作成※4	729,802	3,000,000	0	0	3,729,802
技術支援※3	20,988,982	16,000,000	2,500,000	5,000,000	44,488,982
<b>小計</b>	<b>23,173,014</b>	<b>19,200,000</b>	<b>3,300,000</b>	<b>6,000,000</b>	<b>51,673,014</b>
<b>6.子どもにやさしい復興計画</b>					
アドボカシー活動※5	246,140	0	0	0	246,140
活動報告P.24 子どもに関連する復興(遊び場、公園整備等)	19,562,708	17,000,000	5,279,359	5,000,000	46,842,067
技術支援※3	3,532,276	1,000,000	1,000,000	1,000,000	6,532,276
<b>小計</b>	<b>23,341,124</b>	<b>18,000,000</b>	<b>6,279,359</b>	<b>6,000,000</b>	<b>53,620,483</b>
<b>7.活動報告・広報啓発</b>					
報告会運営・報告資料作成※6	54,933,067	15,250,000	0	0	70,183,067
<b>小計</b>	<b>54,933,067</b>	<b>15,250,000</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>70,183,067</b>
<b>合計</b>	<b>2,080,120,734</b>	<b>1,665,400,000</b>	<b>123,579,359</b>	<b>17,000,000</b>	<b>3,886,100,093</b>
<b>B.活動全般に関わる現地運営※7</b>					
現地事務所賃借料・通信費・交通費等	23,353,595	3,500,000	0	1,000,000	27,853,595
スタッフ・ボランティア現地派遣※8	17,155,746	5,000,000	0	500,000	22,655,746
<b>小計</b>	<b>40,509,341</b>	<b>8,500,000</b>	<b>0</b>	<b>1,500,000</b>	<b>50,509,341</b>
<b>総合計</b>	<b>2,120,630,075</b>	<b>1,673,900,000</b>	<b>123,579,359</b>	<b>18,500,000</b>	<b>3,936,609,434</b>

※3 「技術支援」は、日本ユニセフ協会が事業の遂行にあたり協力協定を締結したパートナー団体(地方公共団体を含む)を通じて支援活動や専門家への業務委託費を含みます。具体的なパートナー団体についてはP.29をご参照ください。  
 ※4 「資料等作成」は、被災者向けの資料作成活動です。  
 ※5 「アドボカシー活動」とは、パートナー団体との連携、調整、情報共有(ホームページ作成、会議、報告会開催等)、また意識啓発や自治体への政策提言等の活動です。  
 ※6 「報告会運営・報告資料作成」には、報告書や印刷物の作成、写真展、ホームページの英文翻訳費、映像・写真記録費用を含みます。  
 ※7 「B.活動全般に関わる現地運営」の支出は、原則として日本ユニセフ協会が活動開始時に事業費から準備した1億円でまかなわれます。なお、6ヵ月収支報告で含まれていた緊急支援活動に直接関わる交通費等については、会計士の指導により、今回「A.緊急支援活動費」に配賦し直しました。

※8 「スタッフ・ボランティア現地派遣」の支出には、滞在費、ボランティア保険等を含みますが、給与は含みません。スタッフとは、ユニセフおよび日本ユニセフ協会の職員を指します。  
 ※9 「支出確定額」とは、すでに支援を届け、支払等事務手続きのみを残す事業、または活動内容と実施金額が確定し、進行中の事業を含みます。  
 ※10 「支出予定額」は、2012年1月末時点での見込み額であり、今後の被災地の状況や活動状況により変わることがあります。  
 注) 本収支報告は、活動の状況をわかりやすくお伝えするためにまとめたものです。報告期間は、3月の支援活動開始時から2012年1月末までで、日本ユニセフ協会の会計年度と異なります。

## 支援活動を支えてくださったみなさま

今回の東日本大震災の支援活動は、多くの個人・企業・団体のみなさまのご協力なしにはなし得ないものでした。日本、そして海外の多くの方々から、被災した子どもたちのために、多大なる募金をお寄せいただきました。また日本のみなさまには「ちっちゃな図書館」への絵本の提供をはじめ、さまざまなかたちで協力いただき、深く御礼申し上げます。

物資の入手や物流の困難な時期、日ごろからのパートナーシップの絆のなかで、物資の寄贈や、迅速な調達・物流に協力いただいた企業・団体の方々、支援事業の広報やアドボカシー

にプロボノで協力いただいた企業の方々、みなさまに深く感謝申し上げます。

支援活動は、現在もさまざまな専門団体とのパートナーシップのなかで実施されています。また、各県のユニセフ協会は、被災地での支援活動の実施に直接携わっているほか、ボランティア協力など側面支援にも積極的に関わっています。

被災地における支援活動の進捗状況については、ホームページで随時ご報告しております。今後とも支援活動を見守っていただきますよう、心よりお願い申し上げます。

ホームページ：[www.unicef.or.jp](http://www.unicef.or.jp)

### ご支援・ご協力のまとめ (2012年1月31日現在)

協力企業・団体 (各項目50音順、法人格名略)

#### 支援事業の実施・運営等にご協力いただいている団体、企業等

##### 【保健・栄養支援】

青森県立保健大学、災害時の母と子の育児支援共同特別委員会、ジェネロテクノロジー、電通、日本栄養士会、日本助産師会、日本プライマリ・ケア連合学会、HANDS、博報堂、災害人道医療支援会HuMA、母乳育児団体連絡協議会

##### 【教育支援】

青年海外協力協会、電通、東京都社会福祉協議会保育部保育士会、博報堂

##### 【子どもの心理社会的支援】

全国児童家庭支援センター協議会、電通、日本国際児童図書評

議会、日本プレイセラピー協会、福島県臨床心理士会、福島交通、福島交通観光、福島青年会議所、JTB法人東京、ファミリーマート、岩手県北観光、岩手県北バス

##### 【子どもの保護】

J-CAPTA、新座子育てネットワーク、博報堂、MIYAGI子どもと家庭支援プロジェクト、やまがた育児サークルランド、全国社会福祉協議会

##### 【子どもにやさしい復興計画】

山形大学、竹中工務店、こども環境学会、子どもの権利条約総合研究所

#### 物資面でのご協力 (ご寄贈および特別協力)

##### 【オムツ・衛生用品】

P&G

##### 【飲料水・保健関連】

伊藤園、SIXテレルスジャパン、キリンMCダノンウォーターズ/ダノンウォーターズオブジャパン、さいたまコープ、サラヤ、ダノンジャパン、VanaH、マグネット・抗菌化研・ジュテック・グリーンテクノ・三谷バルブ・HY、マナテックジャパン、ライオン

##### 【衣料、靴】

アキレス、イオン、コンバースフットウェア、東レインターナショナル・ジャパンプラットフォーム

##### 【教育、心理社会的支援関連】

明石被服興業、アメリカン航空、イケア・ジャパン、いわて生活協同組合、キョクトウ・アソシエイツ、セイバン、ソニー、タカラトミー、日本手芸普及協会、日本ニューバッグチェーン・大隈カバン店、パッチワーク通信社、ピープルツリー/フェアトレードカンパニー、みやぎ生活協同組合

##### 【その他】

武田産業・アバンテック、日産

#### 物流面等での無償協力

いわて生活協同組合、岩手県学校生活協同組合、岩手県教職員組合、岩手県立大学、日本航空、みやぎ生活協同組合、明治学院大学

### 日本ユニセフ協会からこれまでに被災地/被災者に提供された支援物資一覧

おしりふき、エタノール消毒薬、園児用おやつ、栄養機能食品(サプリメント・肝油)、印刷機、折り畳み傘、おもちゃ各種、お絵かき帳、色鉛筆、折り紙、大型自動車、子ども用下着、子ども用靴下、子ども用衣服上下、紙おむつ、子ども用ORS、牛乳、抗菌防臭剤、学校用備品(教卓、教員用デスク、椅子、ワゴン、書棚、ロッカー清掃用具入、カーテン、給食用食器、救急箱、移動式黒板、ホワイトボードなど)、学校用文具類(紙、マーカー、テープ、ファイル、ノート、教本、ドリル)、学用品(ピアニカ、リコーダー、絵の具セット、書道セット、裁縫セット、算数セット、実験器具、天球儀、運動着、ジャージ、上下履き、紅白帽、防災頭巾、給食着、園児用制服、ランドセル、通学バック、手提げバック)、熊よけ鈴、クレヨン、乾燥機、空気清浄機、仮設トイレ、更衣室、軽自動車、原付オートバイ、子ども用ヘルメット、ガスレンジ、回転釜、牛乳保管庫設備、学童クラブ備品、生理用ナプキン、診療用具一式、コピー・ファックス複合機、スクリーン、スピーカー、扇風機(スタンド、壁掛け用)、洗濯機、浄化槽、CDラジカセ、掃除機、授乳用仕切りシステム、自動車、スクールバス、自転車、消火器、障害児療育用品、デントラーライト、手指消毒剤、データ通信キット、通学用懐中電灯、電池、卓上電気スタンド、テレビ、DVDプレイヤー、電気ポット、朝食用パン、ジュース、電気ストーブ、長靴(子ども・大人用)、乳児体重計、乳児・児童用身長計、粘土、妊婦用ジャケット、ビタミン強化米、プリンター、パソコン、プロジェクター、保育園・幼稚園備品(簡易プール、給食用食器、調理器具、ラグ、マット、昼寝用ラック、ワイヤレスアンプ、ボール、避難用おでかけ車、防災カーテン)、防犯ブザー、放射線量測定器、歯ブラシ(乳幼児、子ども用)、マスク、マウス、ミシン、物置、ヨーグルト、USBメモリ、ユニセフレクリエーションキット、ユニセフ幼稚園キット(『箱の中の幼稚園』)、薬品保冷庫、ワクチン、輪転機、レインコート、ろうそく(イベント用)、冷蔵庫



© UNICEF/Japan 2011/Giacomo Pirozzi



© UNICEF/Japan 2011/Noa Kado



© JCU/KO SASAKI



© JCU/KO SASAKI



公益財団法人  
日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)

〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス  
Tel : 03-5789-2011 FAX : 03-5789-2036  
www.unicef.or.jp